

小説史稿

完

913.02
S. 154
W

084912-000-1

913.02-Serials

小説史稿

関根 正直/著

M23

DBB-0187



山
說
史
稿
完

913.02

Se 154A

山说史稿
完



913.025e154A

世の風潮ふひねて新年乃ほら日さあ
の波もよあつたよあつたよあつた
らぬれとまぬれとまぬれとまぬれとま
たふんよりよき世の便よあつたよあつた
よあつたよあつたよあつたよあつたよあつた
よあつたよあつたよあつたよあつたよあつた
よあつたよあつたよあつたよあつたよあつた
よあつたよあつたよあつたよあつたよあつた



337320

夢の境本のこゝに要する文段の方へ
とあるは、*the world of the dream* は、*the dream world* の
直訳を指す。その意味は、*the dream world* の
まじりかたをこゝに示す。また、*the dream world* の
たゞそのうちの一は、*the dream world* の
は、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
て、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の

は、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
文のこゝに、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
て、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
このこゝに、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
は、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
寛弘の寸すのち、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の
ゆあり、*the dream world* のうちの一は、*the dream world* の

とて西珍自笑の節印傾覆は其の如き處よ
+
其れら一の字記復盤鏡のいふや一はよし
らけそ浮世風さの滑杖よふんちかき一
居水游傳の事なかなんかふんしつらと
はハ犬傳田舎源氏のむむ一かきつ
ぬれよよ昭治のはたふあつと海國まづか
まづらそ實射まゝの記家よふんかきん

かきん 田舎の事なかなんかふんしつらと
はハ犬傳田舎源氏のむむ一かきつ
ぬれよよ昭治のはたふあつと海國まづか
まづらそ實射まゝの記家よふんかきん
かきん 田舎の事なかなんかふんしつらと
はハ犬傳田舎源氏のむむ一かきつ
ぬれよよ昭治のはたふあつと海國まづか
まづらそ實射まゝの記家よふんかきん

にやと。是も友の進むに任せて。

明治二十三年一月

著者識

小説史稿



關根正直述

小説の起原

小説といふ語の書に見えたるは釋日本紀に載する弘仁私記の序に。清足姬天皇負辰之時。親王及安麻呂等。更撰此日本書紀。中略上起天地混淪之先。下終品彙甄成之後。中略異端小説。惟力亂神。爲備多聞。莫不該博。云々とあれば。古くと云ふべし。扱其注に。一書及或説爲異端。及語及諺曰爲小説。と見え。漢書藝文志に。小説家者流。蓋出於稗官。街談巷語。道聽塗説者之所造也。ともあれば。小説の起原は。全く世諺巷談より出で、文運

小説の起原

の進むに従ひ。一部の趣向を構へ。一篇の冊子となり。遂に歴史上著名の人物などを借りて。誠しき物語を綴り。人の耳目を娛まふめし事。和漢同趨なるべし。されば小説には。古來左の如き種類あり。

一 巷談

二 巷談を本として。一部の趣向を構へしもの。

三 史傳の事蹟を。敷衍潤色せしもの。

四 作者の肚裏より出で、所謂空中に樓閣を構へしもの。

外國の事は扱置き。我邦上古以來。小説として見るべきもの數多あり。然れども神代の事蹟は。別に仔細ある事なるべし。人の世となりても。神佛の縁記。奇特の物語などは。小説とは

稱し難し。是れ其説をなす者の。目的異なればなり。愚見に。小説と見做すべきもの。最も古きは。夢野の鹿の物語ならんと思ふ。次に浦島子の物語などならん歟。

夢野の鹿の物語は。仁徳天皇の御時。攝津國菟我野に。牝鹿ありて。ある日。牡鹿牝鹿に語るや。昨夜の夢に。霜多く降りて。我身にかゝれり。と見つるは。何の祥ならんと問ふに。牝鹿判じて。それこそ。御身獵人の矢に斃れて。遂に共に鹽塗らるゝ。應ならめ。と答へしが。果せるかな。獵人の矢に中りて。其肉天皇の御饌物となれりとの。物語りにして。正史に載せたり。

釋紀引く所の。攝津風土記には。父老相傳云。中略。牡鹿語其嫡曰。今夜夢吾背爾雪零於祁利止見支。又日都須々支草生多

利止見支。此夢何祥。其嫡中略相之曰。背上生草者。矢射背上之祥。又雪零者。白鹽塗肉之祥。云々。終爲射死。故名。此野曰夢野。
下略と見えたり。

浦島子の事も。雄略紀に見えて。誰も知る如く。丹波國人水江の浦島子。これは。世俗浦島の子と讀み來し所。近時學者の説には。浦の島子と讀むべき由なり。海濱に釣して。大龜の少女と化じたるに會ひ。遂に相携へて海に入り。蓬萊山に到れりとの俗談なり。而して萬葉集九の卷の長歌。又釋紀引く所の丹後風土記には。異境に渡りて三年。故郷懐かしと思ひ。歸りて例の玉手函を開けば。既に三百歳を経じ後なりきと云ふ。是等は古くより云ひ囃す小説にして。元は則ち巷談街話。古老の口語を聞繼ぎて。史籍に載せたるものなるべし。

曲亭馬琴の燕石雜誌四卷に。浦島子の話柄を辨じて。事の趣は陳翰が槐宮記。張文成が遊仙窟記に據りて綴り。玉手函も。陶淵明が搜神後記なる。腕囊に擬して。作爲せし者ならんといへるは。過ぎたり。さまでに深く考へたるものには。あらじを。又梅辻矩清の雛のとまり木下卷に。こは全く雄略の御世にありし實蹟なるを。憚る由ありて。わざと怪しき一話にしたる也。昔公の御作にも。やと云へるはいよゝ附會なり。辨するに足らず。

公家世盛りの時代

延暦遷都以後。奎運大に開け。假字文なども出來てより。一部の趣向を構へ。やゝ人情に近き事を寫し。小説。人間一生の盛衰などを書綴れる。作り物語も出來にけり。其中に最も古

しと云傳ふるは竹取物語なるべし。此書の大意は誰も知る如く。竹取の翁といふ者。竹の中に光り耀く少女を見付け、手に入れて養ふに、すぐくと生立ちて、忽ちに大人になりぬ。此少女世に類ひなき美人の聞えありければ、高位縉紳の人々思ひを懸け、かれが爲め種々の辛き目を見て、心を盡しけれども従はず。最後に帝此事を聞食して、天子の尊と富とを以て靡けんごと給ひけれども、終に八月の望の夜己が故郷なる月の都より、迎への使下り來て、少女と共に昇天せり。其折帝に不死の藥を遺し置きたるを、帝は是たに思ひの種なればとて、天に近き高山に登りて、彼不死の藥を焚きけるよしぞ。其山をふしの山とは云ひける。其煙り絶えず天へ立のほると書きとぢめたり。趣向文體の古樸簡潔なるを思ふに、

物語のれやと源氏にかけるも理りなり。

契沖阿闍梨の河社に竹取物語は寶樓閣經漢書西南夷傳の中なる説に擬したる由見ゆ。當時は漢籍佛典盛に渡來し。支那の小説も舶來したるべければ、或はさる事もぞあらむ。今左に原書の一節を抄録して當時の文體を示すべし。

竹取物語(玉の枝の條)の文

翁(車持)皇子に申すやういかなる所にか。此木はさふらひけん。あやしくうるはしく。めでたき物にもと申す。皇子答へてのたまはく。さをとよこの二月十日ころに難波より船に乗りて海中にいせゆかむ方もいらすおぼえしかど。思ふ事ならでは世の中にい

きて何かせむと思ひしかば。唯むなしく風にまかせてありく。命死なはいかゞはせん。いきてあらむ限りは。かくありきて。蓬萊といふらむ山にあふやと。浪にたゞよひこぎありきて。我國の内を離れて。ありきまはりしに。ある時は浪あれつゝ。海の底にも入りぬべく。ある時は風につけて。知らぬ國に吹寄せられて。鬼のやうなる者出来て。殺さんとしき。或時には來じ方行く末も知らず。海にまぎれんとしき。或時にはかて盡きて。草の根をくひ物としき。或時にはいはん方なくむくつけゝなるもの來て。食ひかゝらむとしき。ある時には海の貝をとりて。命をつぐ。旅のうらに。たすくべき人もなき所に。いろくの病ひをして。行く

へすらも覺えず。船のゆくにまかせて。海にたゞよひて。五百日といふ辰の時ばかりに。海の中に遙に山見ゆ。船の中をなんせめて見る。海の上はたゞよへる山。いとおほきにてあり。其山のさま。高くなるは。是や我がもとむる山ならむと思へど。さすがに恐ろしく覺えて。山のめぐりをさしめぐらして。二三日ばかり見ありくに。天人のようひしたる女。山の中より出来て。おろがねの金椀かまきを持って。水を汲みありく。是を見て舟よりおりて。此山の名を何とか申と問ふに。女答へて云はく。是は蓬萊の山なりと答ふ。是を聞くに嬉しき事限りなし。此女に。かくのたまふは。たうと問ふ。我名はほうかんるりといひて。ふと山の中に入りぬ。其山

を見るに更に登るべきやうなむ其山のうはつら
 廻ぐれば世の中になき花の木とも立てり黄金白が
 ねるり色の水流れ出でたりうれには色く玉の
 橋わたせり其あたり照り耀く木とも立てり其中に
 此とりて持てまうで來たりしはいとわろかりしか
 ども。のたまひしに違はましかはとて此花を折てま
 うで來たる也山は限りなくおもしるも世に譬ふべ
 きにあらざりしかと此枝を折りてしかは更に心も
 となく船に乗りて追風ふきて四百餘日になんまう
 ぞ來れし大願の力にや難波よりきのふなん都にま
 うで來つる更に潮にぬれたる衣をたに脱ぎかへて
 こち來つるとのたまへば翁聞きて打なけきてよめ

る

吳竹のよゝのたけとる野山にも

さやはわびしきふしをのみ見し

是をみこ聞きてこゝらの日ぞ思ひはび侍りつる

心はけふなんおちるぬるとのたまひて

わが袂けふかわければわびしさの

千ぐさの數もわすられぬべし

とのたまふ(以上竹取の文)

次に枕草子に物語に住吉宇津保の類云々とあれば是等も
 古きものならむ然れども今に傳はる住吉は後人の其名を
 假托して作れるにて古のまゝにはあらずと云ふ誠に文辭
 の上に就てもさまで古とは見えす宇津保はいかにも誤

脱多く。錯簡もあらんと見えて解し難き所多けれど。これは猶住吉よりは古き事著し。又伊勢大和の兩物語は同じ趣きながら伊勢は延暦遷都後程遠からぬ時代の作。大和は遙に後世のものに見ゆ。

但し伊勢物語に書ける所は業平朝臣時勢を慷慨する餘り。自ら行ひを汚して振舞ひし事實にて。而も朝臣の自記なりといふ。又大和も打聞うちきこのまゝを記せる物にて。全く架空の談のみにあらねば。打まかせて小説とは云ひ難からん歎。

又濱松中納言物語といふあり。中納言なる人。唐土からこにわたりて。彼國の后とかたらひ。子を設けて歸朝したる事より書始め。落久保物語は中納言なる人の女。繼母の悪みによりて。わ

びしく過すうち。婢女のあこぎか媒にて。三位の中將に契り。後に繼母の家を脱して。中將と相住み。末くは榮えたる事をかけり。又とりかへばやといふ物語は。ある卿男女二人の子を持てるに。男君おきなは平生心弱く物耻ぢをし。几帳いさだかの中にひろまり勝ちにて。父君のさいなむには。涙をさへ流かす有様なるに。姫君は引かへて雄々おとどしう。外とにのみ出居て。男子おとこどもを相手に。弓矢などを弄ぶ體なるを。父君憂き事に思ひて。何卒此二人の性質を取り替へばやと願へる由を記せるなり。斯く種々に趣向を盡し。情致を寫せる作り物語。あまた出來たる中に。源氏物語は絶世の大筆にして。趣向文章の巧妙なるは。何人も知る所なれば。今更に喋々せず。唯この前後の物語も。一ひとわたり珍らしく。興ある様にはあれど。目前の世態人

情を寫して。あつも是程に人心を感動せしむるはあらじ。狭衣などは専ら源氏に倣ひて書けりと見ゆれど。猶いたく劣りにたり

源氏物語(橋姫の巻)の文

薰中將宇治八宮の姫君を垣間見の條

薰中將宇治ノ八宮ノ山寺ニ宿リ給フヲ訪ハントナ有明の月の。また夜深くさし出る程に出立て。いと忍びて。御供に人などもなく。やつれてはえけり。河の宇治川こなたなれば。舟などもわづらはで。御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに。霧ふたがりて。路も見えぬ。えけ木の中を分け給ふに。いとあらまじき風のきほひに。ほろとと落亂る。木の葉の露の散りかゝるも。いとひやゝかに。人やりならず。いたく濡れ給ひぬ。かゝるありきなども。を

さく。習ひ給はぬ心地に。心細くをかゝる覺されけり

中將ノ歌

山山たろじに。たへぬ木。葉の露よりも。あやなく脆き我

涙かな。山がつの驚くもうるさしとて。隨身の音もせさせ給はず。柴の籬を分けつゝ。うこはかとなき水の流れ

ともを。踏みおたく駒の足れとも。猶忍びてと用意し給

へるに。かくれなき御匂ひぞ風に從ひて。ぬしヌシ知ラマ香コソ句ヘレ秋ノ知らぬ香

と驚くねさめの家々ぞ有ける。近くなる程に。其事とも

聞分りれぬ物のねとも。いとすまげに聞ゆ。常にかく遊

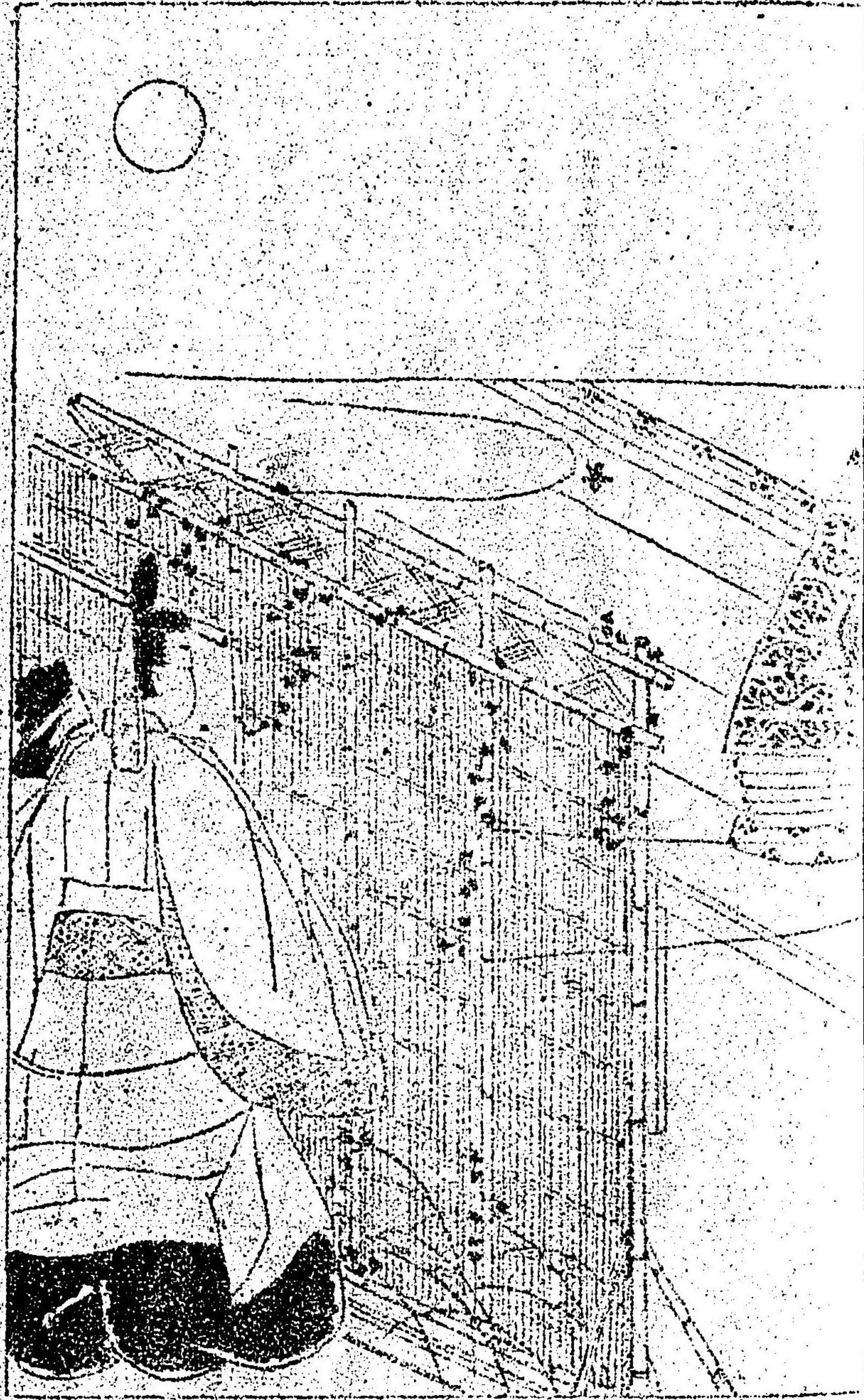
び給ふと聞くを。ついでなくて。御子の御きんのねの名

高きも。えきかねぞかし。よき折なるべし。と思ひつゝ。入

り給へば。琵琶の聲の響きなりけり。黄鐘調ウツクにあらべて。

世の常の搔合せかきまなれど。所がらにや。耳なれぬ心地にて。

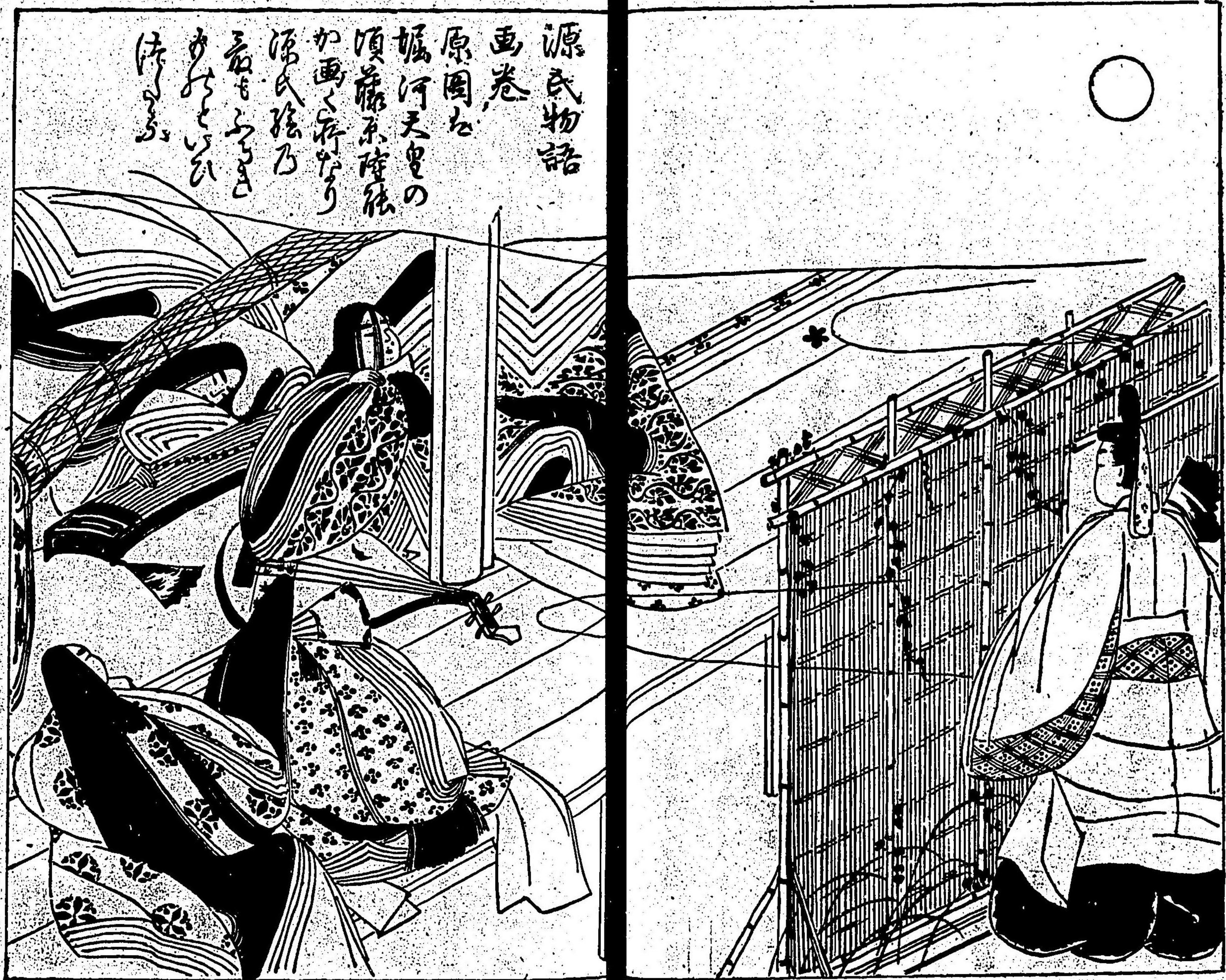
かき返すばちの音も物清けに面白しま箏このこと。あはれ
になまめいたる聲してたえと聞ゆ。あはし聞かまほ
しきに忍び給へど御けはひあるく聞付けて殿居人とめ
くをのこなまかたくなあき出来たり殿居人ノ詞あかとなん籠
りおはします御せうろこをこり聞えさせめと申す中將な
にかはあか限りある御行ひの程をまぎらひと聞えさ
せんにあいなしく濡れく参りていたづらに歸ら
んうれへを姫君の御方に聞えてあはれとの給はせば
なん慰むべきとの給へば殿居人ノ見にくき顔うち笑みて申さ
せ侍らんとて立つを中將あはしやと召しよせて年中將ノ詞ころ人
傳てにのみ聞きてゆかしく思ふ御ことの音どもを嬉
しき折かなあはし少し立隠れて聞くべき物の隈あり



源氏物語

画卷

原園を
堀河天皇の
頃藤原隆能
が画を存せり
源氏隆乃
画もふりき
かたもいふ
はるま





や。つきなくさし過て参りよらん程。皆ことやめ給ひて
 はいとほいなからん。との給ふ。御けはひ顔かたちのさ
 る直々しき心地殿上人にもいとめでたく忝なく覺ゆれば人
 聞かぬ時はあけ暮かくなん遊ばせど下人下人にても都の
 方より参り立まじる人侍る時は音もせさせ給はず。大
 かたかくて女君たかれはします事をばかくさせ給ひ
 なべての人知らせ奉らじと覺この給はすると申せ
 ば打笑ひてあちき中將ノ詞なき御物隠しなり。忘か忍び給ふな
 れど皆人有難き世のためこに聞出べかめるをとの給
 ひてなほこるべせよ。我はすきとこしき心となき人
 ぞかくてれはしますらん御有様のあやしくけになべ
 てに覺え給はぬ也。とこまやかなの給へばあなかこ

公家世盛りの時代

心なきやうに。後の聞えや侍らんとて。あなたの御前は。竹のす透垣いがいとこめて。皆へたてとなるを。教へよせ奉れり。御供の人は。西の廊によび居ゑて。此殿居人あへしらふ。あなたに通ふべかめる。す透垣いがいの戸を。少し押開けて見給へば。月をかゝり程に。霧わたれるを眺めて。すたれをすこと。短く巻上て。人々居たり。簀すのこ子にいと寒けに。身ほそくなえはめるわらはひとり。同じ様なるたとな杯居たり。内なる人。ひとりは柱にすこと居隠れて。琵琶を前に置きて。撥ばちをてまさぐりにいつゝ居たるに。雲隠れたりつる月の。俄にいとあかくさし出たれば。扇大姫ノ扇ならで。是しても。月は招ぎつべかりけり。とてさし覗きたる顔。いみじくうたけに。匂ひやかなるべし添そよ伏し

たる人は。ことの上中姫君ノ扇に傾きかゝりて。入る日をかへす撥こそ有けれ。さまとにも。思及び給ふ御心かな。とて打笑ひたるけはひ。今すこと重りかに。よとづきたり。及ばずとも。これも月に離るゝ物かは杯なまはかなきとを。打とけの給ひかはしたる御けはひども。更に余所よそに思ひやりしには似ず。いとあはれになつかしうをか。昔物語中將ノ心なとにかたり傳へて。若き女房杯の讀むを聞くに。かならずかやうのを云ひたる。さしもあるさざりけんと。にくゝ推さからるゝを。けにあそれなる。物の隈あるべき世なりけり。と心うつりぬべし。霧の深ければ。さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出なんとれば。す程に。奥の方より。人れとすと告げ聞ゆる人やあらん。すたれれる

して皆入りぬ。(以上源氏物語)

公家世盛りの時代には。作り物語いたく流行し。數多く出來つと見えて。殿うつり物語。井手中將物語。こまのゝ物語。梅壺の少將物語。人め物語。ねさめ物語。埋れ木物語。道心すゝむる松か枝。月まつ女。交野少將物語。藐姑射の刀自物語。唐もり物語。桂の宮物語。せり川の大將物語。芹つみし物語。正三位物語。みつから悔ゆる物語。あし火たく屋の物語。ふせこの少將物語。大津のわうじ物語。ねほる物語。袖ぬらす物語。玉の緒。姫君物語。かくれ篋物語。かほね尋ぬる宮。とはきみ。をり河。淺うづ。夜半のねさめ。しゝら物語。朝くら物語。初雪の女御物語など。いふは。枕草子。源氏物語。狹衣。更科日記。榮花物語等に。名のみ高く聞えて。其書を傳らす。但し。多田義俊は。殿うつり物語を

見しやうに。青陽唱詠の中に所く云へれど。誠のものにや。覺束など。多武峯少將物語も。今の書も。其世のにはあらじと云ふ。此外名たに聞えずなりぬるも。多かりしならむ。又風葉和歌集に。種々の物語の名あまた見ゆれど。此書を文永の頃撰集したるものと聞けば。爰に引かず。

當時と文學上等社會にのみ行されて。小説の作者も。之を愛讀する人も。皆上流の人のみなりけん。當時小説の骨子は。大低公卿の家事。主人公は常に王公貴人。やとなき姫君にして。趣向も何れも。艶話ならざるをなけれど。さすがに近世の如く野鄙ならず。文章は凡べて女文字の名を負へる。假字文を用ひ。殊に用意して。優美にかけり。されば。此文體又漸く流行して。後に出來し榮花物語。續世繼。尙下りて増鏡の類の事

實を記せる歴史さへ。遂に彼の物語文の体を用ひ。甚しきり成文熟語を。其まゝに抄したる條も見ゆ。

鎌倉將軍の時代

保元平治の亂後は。公家の式微と共に。文學も形の如く衰頽し。鎌倉幕府の創立以來。小説世界は寂莫として音もなす唯。鳴門中將物語。秋夜長物語など。二三種あれど。前代に比すれば。文章の下れるは更なり。趣向も拙なく。僅に一帖の中に。ありのくたりを綴れるまでにて。宇津保源氏などの如く。大部數篇にわたりて。伏線照應など。細かに構へしものにはあらず。鳴門中將物語は。一名をなよ竹草子とも云ひて。繪卷にもしたり。其文は下に抄す。秋夜長物語は。後堀河院の御宇に。瞻西上人と聞えし人。桂海と稱して。未だ壯年の頃に。花園左大

臣の御子。梅若君といふ童の。三井寺の坊にありしを見そめて。契りを結びしより事起り。叡山三井寺の争ひとなり。山の衆徒園城寺を焼討ちにする事あり。かゝる騒きにより。梅若は勢多の橋より投身してあへなくなり。桂海は其後西山の岩倉に菴を結びて。まめやかに行ひすまじ。終りに東山に雲居寺を草創せし事の物語にして。庭訓往來と同作なりと云傳ふ。

鳴門中將物語の文

夜もやうくふけぬれど。よるの御殿へもいらせ給はず。殿居申しの聲きこゆるは。丑に成りぬるにやと。御心をいたましむる程に。藏人忍びやかに。此女まゐり侍る由奏し申ければ。嬉しう覺しめされて。やがて召されに

けり。漢武の李夫人に如ひ。立宗の楊貴妃を得たるためし。是にはまさり侍らじと。御心のうちもかたじけなく。さまと。かたらひ給ふ程に。明けやすきみじか夜なれば。暁近く成ゆくに。此女房の有様をかきくとき。細かにはあらねど。心にまかせぬ事のさまを。奏し申ければ。先づかへし遣はされにけり。御心ざし淺からず。やがて三千の列にもめし置かれて。九重の内のすみかをも。御はからひあるべきにて侍りけるを。まめやかに歎き申して。さやうならば。中く御なさけにも侍らじ。淵瀬をのがれぬ身のたぐひにもなりぬべし。唯このまゝにて人のいたく知らぬ程ならば。絶えず召しにも従ふべき由を申ければ。遂に舊のすみかへ歸されて。時々忍びて

召されけり。彼少將は。隱者なりけるを。あらぬ方に付けて召出されて。よろづに御なさを懸けられて。近習の人数にくわへられ。杯して。程なく中將になされにけり。つゝむとすれど。自づから洩れ聞えて。人の口のさがなさは。其頃のもてあつかひにて。なるとの中將と申ける。鳴門のわかめとて。よきめの乃ほる所なれば。かゝる異名を付けたりけるとや。(以上鳴門中將物語)

此時代より。貴人の間には。繪卷物を弄ぶ事始れり。鎌倉右大臣實朝公の幼き時。陸奥前後合戦の繪卷物を。愛玩し給へりと云ひ。建暦二年十一月。大江廣元小野小町一期盛衰の圖を献じ。朝光は本邦四大師の繪卷を進覽せしに。數卷の中。此兩部類に御鍾愛に及びし由。東鑿に見えたり。此外小芝垣草子

〔詞書爲家卿。畫信實卿〕時秋物語〔詞書爲家卿。畫光長〕地獄草子〔詞書寂蓮。畫光長〕吉備大臣入唐草子〔詞書兼好。畫光長〕など聞ゆるも。皆此時代に出來しなるべし。抑繪卷物は先づ物語ありて。うれに繪畫をかき添へたるが始めなりけん。伊勢住吉古きは更なり。有名なる伴大納言の繪卷も。詞書は宇治拾遺物語の文と。つゆ異なる所なし。

民間には此頃成文の小説はなく。唯質朴簡單なる。街談巷話行はれき。うは先づ頼光と酒顛童子。大江山退治を。繪卷に畫けり。は後の事なり。維茂の戸隱山。渡邊綱が鬼の腕。頼政が鶴退治の如き。又仁田忠常が富士の穴入りなど。一場の口話に過ぎず。而して其説く所。何れも勇まじき。腕力沙汰なるは。いかに。惟ふに是れ數年來。公家政治の文婦を厭ひ。専ら武斷

を尙びし。人情世風の然らしむる所なるべし。斯くて平家物語源平盛衰記等。演義の史類は。右の巷談街説を。事實に混じて。記載したるものならん。又判官物語杯も。此時代の作なるか。是は演義の史類に似たれど。猶全く小説なり。是等は適今日に残れども。當時上下に行はれしものとは聞えず。

判官物語〔靜舞の條〕の文

靜其日の裝束は。白き小袖一重ねに。唐綾を上引重ねて。白き袴ふみしたき。わり菱縫ひたる水干に。たけなる髪高らかに結なして。此程の歎きに。面瘦て。薄化粧眉細やかに。つくりなす。皆くれなるの扇を開き。ほう殿に向ひて。立たりけるが。流石鎌倉殿の御前にて。の舞なれば。おもそゆく。や思ひけん。舞兼ねて。ぞやすらひける。二

位殿はこれを御覽じて。去歲の冬四國の波の上にても
られ。吉野の秋風に吹かれ。今年、海道の長旅にて。瘦衰
へ見えたれども。靜を麗文ナランよも我朝に。女ありとも覺
えねと。仰られける。靜其日は白拍子多く知りたれども
殊に心に染むものなれば。忘んむじやうの曲といふ。白
拍子の上手なりければ。心も及はぬ聲音にて。はたとあ
けてぞ謠ひける。上下あつと感ずる聲。雲にも響くはか
り也。近くは聞て感じけり。聲も聞えぬ山までも。さころ
有らめとてぞ感じける。忘んむじやうの曲。なからはか
りかぞへたりける所に。祐經心なるとや思ひけん。水干
の袖をはづして。せめをぞ打たりける。靜君が代のだあ
りければ。人々之を聞て。なさけなき祐經かな。今一をり

舞のせよかしとぞ申ける。詮ずる所。敵の前の舞ぞかし。
思ふ事を謠さゞやと思ひて。

あづやあづ。くのをた巻くりかへし。

昔を今にあすよしもがな。

よしの山。峰のしら雪ふみわけて。

入りにし人のあとぞこひしき。

と謠ひたりければ。鎌倉殿みすをさつとをろし給ひ。白
柏子は興さめたるものにて有けるや。今のまひ様。歌の
うたひ様けしからず。頼朝るなかうとなれば。聞知らじ
とて歌ひける。あづのをたまき繰返しとは。頼朝が世盡
きて。九郎が世になれとや。あそれをほけなく覺えたる
物かなと。御氣色りそりければ。靜またおし返し。

よしの山峰のしら雪ふみ分て
入に人のあと絶えにけり。
と謠ひければ御簾高らりに上げさせ給ひて。ろろと
しくも褒めさせ給ふ物りな。いふかさきもあり 此所誤脱
モヤアラン二位殿より御ひきで物ひろ蓋に置き給とりけ
り鎌倉殿より貝摺たる長持三えた給そり。宇津宮二え
た。小山の左衛門二えた。樂頭三人して九えた。其外一え
た二えた。おたひの廻りに破子を井べて居ゑたり。長持
のきりやうあらぬ人。小袖もて来てさしおき。直垂を。
投出しなどしける程に。小袖の山をぞつみたりける。相
良の十郎承りて。あるとたりければ。長持六十四えた。と
ぞ記しける。靜これを見て。我祿をとらんために舞ひた

らは。判官殿の命のためこゝろ舞ひたれ。長持を一えた
も残さず。若宮の修理のため参らせけり。小袖直垂も
一つもちらさず。我君のけう養のため。大御堂へ参ら
する。やがて堀の刀自り屋かたへり。明くれば鎌倉
殿にいとま申ければ。心ある侍士ども。堀の刀自が屋形
へ行き。さまざまに慰めけり。鎌倉殿より百物百をぞ給
はりける。やがて親家承りて。五十余騎の勢にて。都まで
送りけり。靜わが君の歎き深かりければ。道すがら千僧
供養をしてぞ上りける。北白川の宿所にかへりて。あれ
ども物をもはかしく見いれず。うかりし事の忘れ
がたければ。問ひ來る人も物うとて。たゞ思ひ入てぞ
有ける。母の禪師も慰め兼ねて。いとゞ思ひ深く。明暮は

持佛堂に引籠り。經を讀み佛の御名を稱へてありけるが。かゝる憂き世にながらへても。何かせんとや思ひけん。母にもおろさせず髪をきりて。天りう寺の麓に草の庵を結び。禪師諸共に行ひすまてぞ有ける。心なさは人に優れたり。惜とかるべき年ぞかゝ。十九にてさまをかへ。次の年の秋の暮に。紫雲たなびき音楽うらに聞えて。往生の素懷をぞ遂けにける。禪師も程なく。ともに成佛とけるとかや。(以上判官物語)

室町將軍の時代

足利時代に至りては。繪卷の草子いよく流行せり。其一二を云はゞ。福富草紙は。土佐光信か畫けるものにて世に名高し。これは福富織部といふ長者あり。生れつきの技藝ありて。

福富草紙縮圖

羨し人

七日の物語

門開

人達

と

か

か

神社乃

朝

あ

鬼

人

竹

と

は

は

其

廻

と

い

お

や

福



高貴の家に出入し。寶ますく殖ゆる故に。隣りの貧人之を羨み。其藝の傳授を請ひければ。長者これに秘藥を與へし所。忽ち腹痛せしが。うれにも拘らで。ある高貴の館に参り。御前に於て種々の美味を賜はり。飽く迄喰ひて。さらば珍らしき藝仕らんとせしに。其技わざの成らぬのみかは。益腹痛みて。遂に穢けがらはしき振舞しけるより。えせ者よと杖もて打たれ。逐た出され。這ふく家に歸れば。妻は世に鬼姥といふ。渾あだ號ある女なるが。彼長者の己が夫をたばかりしを恨み。ある日道にて。嚙付きたりといふ。滑稽的小説にして。鉢かつきの草子は。繼母に虐せられし。孝女の事をかける。悲哀的小説なり。又文正草子は。常陸の國の。鹽屋文正常岡といふ。大福長者の事を記り。此草子は。近古寶永の頃までも。世に行はれて。正月吉書

の次に冊子の讀初として。女子は必ず此草子を讀みきとなり。されば後世にも多く傳りて。大小本の摺版あまたありといふ。此外小町草子。常盤嫡物語等。いづれも此時代に出來し。繪入草子の慰み本にして。上流社會に行はれしものと見ゆ。抑繪卷は畫をこゝ主とすれ。趣向文章を擇はねば。小説として見るには價直薄し。唯婦幼のお伽話たるに過ぎざるなり。然れどもこれころ。後世の繪入小説。草雙紙の權輿にてはありけめ。

爰に亦言別きて云ふ事あり。予は當時最も流行せし。謠曲といふものも。一種の小説として論ずる事是なり。抑謠曲は演劇の濫觴にころいふべけれ。小説といはんには。必ず不審に思はるゝ人もあるべし。然りともし。余は演劇も脚本は。猶小説

の一種と定むるなり。彼謠曲は笛鼓にあはせ。節譜を調べて謠ふ上は。音樂史の領内にも入るべけれど。謠曲本の性質を究め。趣向文章の上より歸納すれば。前に掲げし第二種のもの(巷談を本として。趣向を構へしもの)及び第三種のもの(史傳の事蹟を敷衍潤色せしもの)たるに相違なきをや。

謠曲は。當時士大夫の間に盛に行はれしが。其頃の人々は。大かた文學なく。大部數齣の小説を。讀み果すべき者なれば。にや。謠曲は一小齣の短きを以て。首尾全くするを例とせり。而して當時は。文學の衰頽其極に達し。文字を知るも。唯僧徒のみなりしかば。謠曲も又皆彼徒の手になれり。先づ江口。山姥の能。一休禪師の作といひ。卒塔婆小町も。寶性院宥快の作。高砂。兼平などは。僧正徹の作なりとぞ。但し内外百番。いづ

れも清次。元清等の作と記しあれど。作譜ころ此人々ならぬ。趣向文章とも。僧侶の述作なる事は。世既に定説あり。殊に謠曲の例として。必ず世間の無常を種子とし。諸國修行の僧を出し。故人の亡魂幽靈を。解脱成佛の趣に。作爲せるにても知らるゝ也。

謠曲(竹生島)の文

竹タケに生るゝ鶯のく。竹生島まうで急かむ。抑ツキ是は延喜の聖代に仕へ奉る臣下也。扱も江州竹生島の辨財天は。靈神にて御座候間。此度君に御暇を申し。唯今竹生島に參詣道行仕り候。四の宮や河原の宮居末はやま。く。名もはしり井の水の月。曇らぬ御代に逢坂の關の宮居を伏拜み。山越近き志賀の里。にはの浦にも着にけり。く。面白シテサシや。

比は彌生のなかばなれば。浪もうらゝに海の面ツレ霞渡れる朝ほらけ。長閑のびやかに通ふ舟の道。うき業わざとなき心かな。是は此浦里に住馴れて。明くれ運ぶうろくづの。數を盡して身ひとつを。助けやすると。佗人ほかの人の隙も浪間に明暮て。世を渡る社物こゝろものうけれ。よしく。同じわさながら。世にこえたりな此海の。名所多き數々に。く。浦山かけて詠むれば。志賀の都。花園。むかしながらの山櫻。眞野の入江の船ふねよほひ。いざ漕こよせて事とはむ。く。いかにワキ是成舟に便船申さうなふ。是は山田矢橋の渡し船にてもなし。御覽候へ。海士の釣舟にて候程に。便船は叶ひ候まじ。こなたも。釣舟と見て候へば。社まゝ便船とは申せ。是は竹生島に始めて參詣の者也。誓ひの舟に乗べき也。實々シテサシ此島は靈

地にて歩み運び給ふ人をいかと申さは御心にも違ひ。又も神慮もはかり難し。さらばお舟を參らせん。嬉しやさて誓ひの舟のりの力と覺たり。けふは殊更長閑にて心にかゝる風もかゝる名こらさゞ浪や志賀の浦におたちあるも都人が痛はしや。御舟にめされて浦々を詠め給へや。所は海の上。國はあふみの江に近き。山々の春かれや。花のさかながら白雪のふるか。残るか時。あらぬ山は都の富士かれや。猶さえかへる春の日よ。比良のねおろし吹とても。沖漕ぐ舟はよも盡じ。旅のならひの思はずも。雲るの余所に見し人も。同じ舟よなれ衣。うらを隔てゝゆく程に。竹生島も見えたりや。緑樹陰を。づむでは。魚木に登る氣色あり。月海上に浮むでは。兎も

波をはらるか。面白の浦のけしきや。(以上竹生島)

此時代の末に。淨瑠璃十二段草子といふもの出来ぬ。此草子は。源牛若奥へ下らん道すがら。三州矢矧の宿に至り。長者の女。淨瑠璃姫に。忍び逢ふ事より。書始めつ。此姫の母は。海道一の遊君ありしが。子なきを憂ひて。薬師淨瑠璃光如來を祈り。利驗によりて。設けし子なれば。淨瑠璃姫と名つけし由。其姫の事を書けるによりて。淨瑠璃草子といへる也。十二段に作りし。薬師の十二神將による所也。又平家物語の。十二卷なるに。據りしもの歟ともいふ。又此草子は。俗説に。小野お通の述作といふは。極めて誤りなり。それよりも。古き由の確説あれと。今略す。これを始め。扇拍子にて。素語り^{ナカ}にせしを。後に。三味線といふ。樂器渡りて。より。うれに合せて語る事。一般の

習ひとなりきとぞ。かくて後、八島高館、小袖曾我、伏見常磐などいふ舞の本をも。また文正草子、梵天國物草太郎などいふ例の御伽草子をも。共に淨瑠璃節に語る事となりきとや。鬼にも角にも。此時代は目に視る小説少くして、耳に聞くもののみ行はれき。これ當時貴賤文字なく、讀書ある人、尠かりに依てなり。

淨瑠璃十二段草子(吹上のたんの文)

夜も深更にふけ、れば源氏のうち神正八幡は世にもあはれと覺えめし。十四五ばかりの童子とけんじ給ひつゝ、うしろの濱へ御出あり。上るり御せんの有様を。をらんじて、涙をたさえてのたまひけるは、いかにや。汝が尋ぬるくわじ冠者は、此濱へのうしろなる松の六本生ひた

る計に、出されてゐるよと。そが、そや空しくやなりつらむ。むらがらすの騒ぎしが、きのふけふといさ知らず。いらせ給へ姫君とて、上るり御前の御袂ひかえて教へ給ひしが、かき消すやうに失せ給ふ。上るり御前を夢さめて、いかかる神の御告げぞと、嬉しさ限りもまじまじと。夜もほのくと明ければ、二人姫侍女の人は立出て、うしろの濱の松ばらを、こゝやかしくと尋ね給へば、痛はこや御曹子。あらし濱邊の潮風に、つりの如くに吹上る。眞砂の下にぞうづもれて、姿形も見え給はず。爰に眞砂の中より、黄金造りの御はかせの、いづきすこと見えたりけり。上るり是を、このみにおほえめし。れん待女せん泉殿と只二人楓。うへでのやうなる御手にて、泣くくまさを堀り

給へば。わらやまこもの中よりも。桶とひとやくを堀り
出す。いよく。是に力を得て。猶々堀りて見給へば。さも
あさまなき姿なる。御曹子を引出し給ひける。いつくし
かりける御姿。おほめる花の如くにて。見るに涙も止ら
ず。うづもれさる砂を。絹の褌にて打拂ひ。御膝にかきの
せ奉り。天に仰ぎ地に俯して。悲み給ふ御有様。あはれと
云ふも。たろかなり。いかに候ふ都の殿。一夜の契りにあ
れろめと。上るり是まで参りさり。いかなる定業にてま
しますとも。みづからは。是まで参りさる。心さとの程を受
給ひて。今一度よみがへり給へと。むねにあて顔にあて。
流涕こがれ給へとも。其かひなかりけり。中略いつくより
とも知らねとも。十六人の山伏の通りあひ給ひて。いさ

く。われらが行力の奇特あらはさんとて。さまと加
持し給へば。上るり御前なめならず。喜び給ひて。れ
んせい殿ふさりの中にとりこめて。ないつ笑ひつ。此程
の心づくしの有様を。語り給へば。御曹子は。夢の心地と
て。さもやつれさる御袖を。おほらせ給ふぞ。哀れなる。
扱又物語の類に。曾我物語。義経記も。此時代のものなるべ
し。曾我物語は。幸若を謠ふ者の手になれりとの説あり。義経
記も。東山將軍義政の頃。繪を描加へて。卷物としさるもあり。
又當代の文學家なる。一條禪閣兼良公の。鴉鷲合戦物語。及び
精進魚類合戦物語。此書は。一名魚鳥平家とて。平家物語の體
に倣へり。作者詳ならねど。當時の物なるべし。かごと。滑稽的
小説ともいふべきなれど。上下の間に。普く行はれしにあら

ず。是等と應仁亂後。父子叔姪動もすれば鬭争と孰れ曲直も定め兼ねる時勢なるを。諷刺の寓意もて。書けるならんとの説あり。さもあるべし。此外鳥部山物語。松帆浦物語などいふも。今に傳はりて。群書類聚の中にも收れり。鳥部山は。武藏國なる何某和尚の御弟子に。民部卿といふ少年あり。一年都へ上りし時。北山の櫻狩りに。年二八ばかりある貴介の公子を見初め。獨り胸のみ焦しけるが。知る人に聞けば。中納言なる人の子にて。辨の君といふ由を知り。遂に便り求めて。彼曹司へ通ひ。互に淺からず契りしが。定めの日經ちて。民部は東へ歸りけり。辨の君いさく戀歎きて。遂に重き病に罹りしかば。中納言も母上も。いとほしがりて。東路へ使をよて。民部卿を呼ひ迎へつ。民部も且驚き且喜び。急ぎ都へ登りて。君の曹司

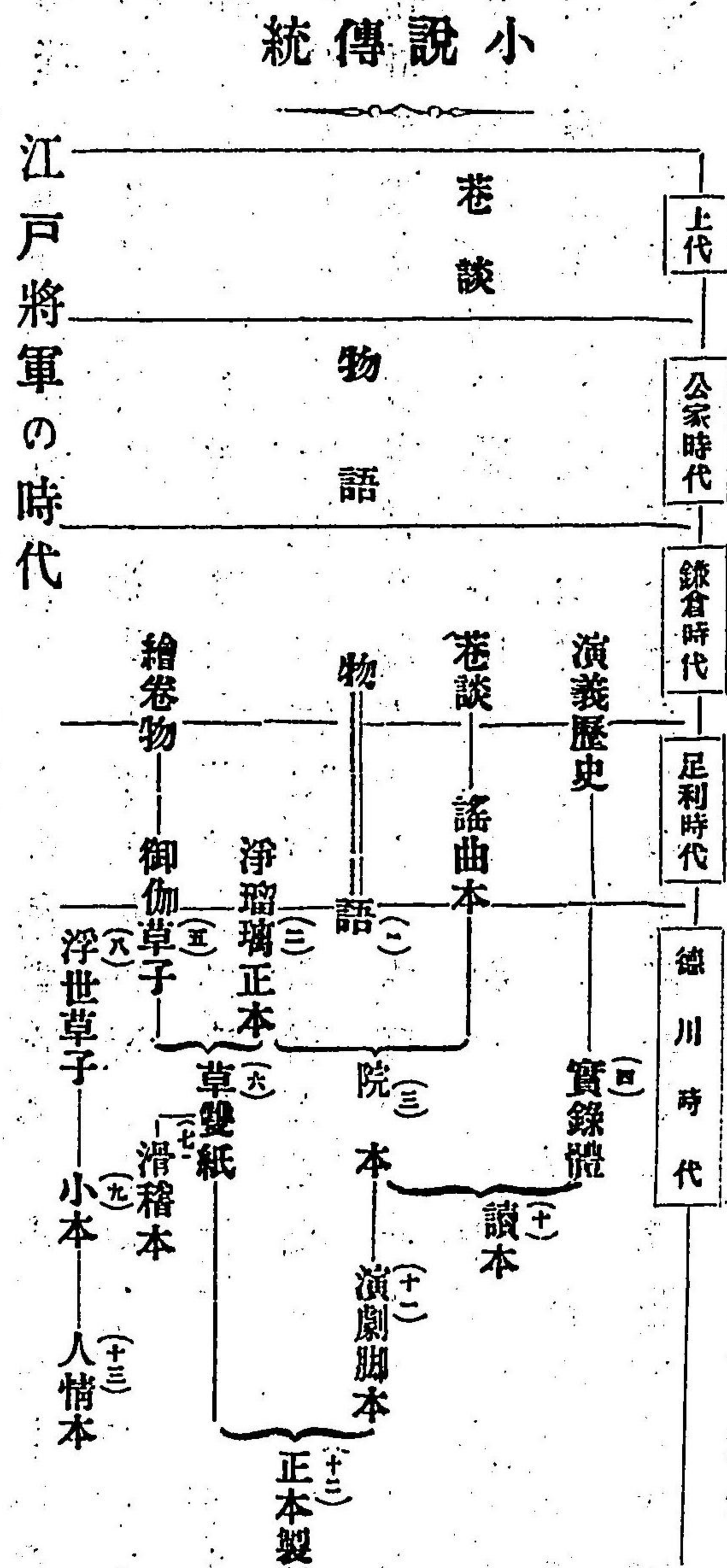
を音なへ。早既に身罷りて。とりたさもすみにまといふ。民部は身も浮くばかり歎きしが。遂に鳥部山なる。たぐつきの前にて。刃に伏えて殉せんとするを。中納言止め給ひ。意のまゝにもせさせね。頓て北山の傍に。柴の庵を結び。墨の衣に染めりへて。行ひすまをけりと云ふ。

松帆浦物語は。洛東四條わさりに。中將なる人の若君を侍従の君といひけるが。叔父の禪師房。横川にありける方へ登りて。大かこの學文。和歌の道にも心を入れて。たはせしに。北山の櫻の盛りに。人々にうゝのかされ。花見におはしるに。岩倉の何がし坊に。宰相の君といふ人。此侍従の君を見ろめて。かさらはれけるが。さまの障り出來て。宰相の君淡路へ流され給ひければ。若君あとを慕ひて。彼島へ行さまふに。宰

相の君は松帆浦に住みかへ給ひけるが此程空しくありつる由を聞て我も身を投げ死なんとせしをいよの法師とて今止めてさまぐ諫めけるにさらば法師になりなんとて今年十六の蒼の花山の端出る月のさまをさる御ぐを刺り落していよの法師と諸共に高野へ登りける物語なり此書の奥書に兼載在判とあり兼載卿は文明の頃の人なり柳亭種彦は恐らく偽書ならんさまで古きものにあらじと云へれど天正以前の物なる事著し徳川時代に至りても是に類する物語あり下にいふべし

以上は上代より公家世盛りの時代鎌倉室町兩覇府の時代迄沿革の大略なり徳川時代に至りては小説の種類頗る多し今前後を通じて沿革の表を圖し本支分脈の筋を掲ぐる

事左の如し(演義歴史を表中に收むるはいかゞなれど實録體讀本杯の祖なれば姑く掲け置きつ)



徳川時代の小説は右の圖に記せる如く頗る多端に渉れば便宜のよめ(一)(二)(三)の簽を附けよ其序次に従ひて演ぶべし

(一)物語

當代の初めに藻屑物語といふありき。これと寛永の頃櫻川侍従の御許に伊丹右京といふ容色すぐれし小姓あり。同じ小姓の舟川采女といふ美少年と互に淺からず語らひしが。細野主膳といふ者。右京に戀慕し。云ひ靡けんとせしかど。其思ひを果さざるを恨みて。密に右京を討さんと計れり。右京此事を知り。先づ主膳を殺害せしに。主膳の母之を愁訴し。りしかば。右京は遂に今戸慶養寺に於て。切腹申し付られぬ。是を傳え聞きたる采女が悲み大かたならぬ。頓て慶養寺に馳せ至り。右京に殉ひ死に就きし由を記せり。曲亭馬琴が此物語へ書添へし。ゑみのあしに。西鶴か男色大鑑にも。伊丹舟川兩少年が狂死の顛末を載たり。願ふに件の右京采女が事。當

時の人口に膾炙せしならん。此頃までは。戰國の餘風なほ失せせしめて人おのく勇敢なり。こゝを以て。女色を好むをぬることして。男色を歡べるなるべしといへり。此外寛永九年の刊本に。薄雪物語あり。明暦六年恨之助の草子刻梓なれり。此二書は。ある人清水に詣て。薄雪といふ女を見うめ。遂に本意を遂げつれども。彼女身まかりければ。男と髪をたると。高野山に入りつと云ふ。同じ趣きを書きたり。花の縁物語といふは。寛文六年の作なれども。こは前なる鳥部山物語の趣向を。女色の事に改作せしませ也。此外一本菊時雨のえん。はもちの中將美人くらべ杯いふ書もありきと聞ゆ。されど。貞享元祿以後は全く絶えて。草雙紙といふものになりしなるべし。

(二) 淨瑠璃正本

淨瑠璃は足利時代に始り。と事上に述べたり。當代には江戸に諸流の淨瑠璃節行はれ。承應萬治の頃より江戸肥前椽櫻井丹波少椽。長門椽。土佐少椽。石見椽などいへる淨瑠璃語り出で。うれらが正本繪入の小冊子あまた出來しが。後には唯小兒の遊び物となれり。中にも丹波少椽が金平本殊に名高し。寛文延寶の頃なるべし。岡清兵衛。四野宮彌四郎など云へる者。丹波少椽が爲めに正本數多作れりと云ふ。此書の趣向は。坂田の金時が子に金平といふあり。又渡邊の綱が子を竹綱と云ひて。共に剛力の舉動をなす。兇獸惡魔を退治する由をかけり。此正本大に行はれて。世に強きものを。金平何と云ふに至れり。謂はゆる金平足袋。金平煙艸入。金平牛房の如き

是なり。長門椽土佐少椽以下に至りては。さる怪力亂神の事のみならず。稍人情に近き趣向を構へ。其繪もやさしき狀を描けり。是等の正本は。凡べて小形にして。繪入の假名文なれば。全く後世草雙紙の體裁なり。

丹波少椽正本(金平本)の文

金平大國責といふ書の發端

扱も其後うの頃の御門を。後朱雀院と申奉る。時の武將は清和天皇の御末源の頼吉公。智仁勇の名將也。扱又天下の重寶には。渡邊の竹綱。坂田の公平。かれは元來あり者にて。むほうやぶりの大ちから。せい九尺二分。れもて赤き事限りなく。血氣には。兵なり。去るによつて。常々竹綱が諫言をうけ。己が心の儘ならねば。其比渡

邊と不合にして。只何事も横紙にぞ破りける。扱次ぎは
うする刑部定かけ。卜部の左衛門末宗とて。此四人四天
王とめされけり。又平井播摩守清氏と。一人武者と申け
る。三浦の爲宗と。公平が妹むこ。長崎の奉行にて。金剛姫
がをつと也。其外天下の諸大名。たのくかむづき奉る。
源氏の御代ころ目出たけれ。是は扱れき。爰に一つの大
亂出來せり。大國八たん國の大王。あんはく山きらい王
とて。其様あれてすさまじく。せいと一丈にあまり。髪は
猩々に異ならず。多年大日本に望みをかけ。ひたんの枕
を傾け。れと渡らんとたくみつゝ。黒船八百八艘新造と
て。従ふ大臣今鍾馗大臣。けつちうの大臣。なんゑんはく
とらうけまん。大は悪らいさんとて。主に劣らぬ悪臣か。あ



公平本のさし画

公平本

公平本



公平本



公平本

公平本



ひ計つて。人の國を悉く打從へ。我儘に暮らせしが。榮え
うの餘りに此頃は。日本に望みをかけ。後の難をも顧み
ず。大日本にたゞ渡る。はやれと付けて。我物顔に。大日本
を大文字に。あんはく山日本鬼來王と書し。旗先にたて
風にまかせて。長崎へ押渡る。悪事千里をひゞかすとや。
長崎の押え三浦が妻。金剛女篤と見届け。都へ注進せん
と小船に打乗り。釣のあまと出立ち。舟底には大鎧。父公
時が譲り五尺八寸の鬼丸を取入。沖なる大船に近付寄
り。事を伺ひ。あゝらよとなの殺生やと。さらぬ體にて居
たりける。(以上金平本)

三院本 五段
續き

天和貞享の頃二百餘年前に至り。浪花に井原西鶴といふ俳

諧師ありき。竹本筑後少椽のため。曆。また凱陣八島杯いふ一段の淨瑠璃文を作りたりしが。元祿の頃(二百年程前)に至り。有名なる近松門左衛門始めて謠曲の文體を和(な)め五段續きの院本を綴り。之を操曲(人形芝居なり)に演じ。次ぎて竹田出雲。並木千柳の徒出て。同例を襲ひ數多の院本を著して刊行せり。世に之を丸本といふ。丸本とは。大序より大團圓に至る迄の總べてを。一冊としる稱なり。

因に記す。音曲昔物語に云。延享の頃百四十年程前までは。稽古本と云ふとなじ。皆丸本なり。但し拔本と申すは。景事の道行本計り。段物拔本の始りは。寛延二巳年。御當地には筋違御門外大坂屋秀八が元祖なり。其後茅場町藥師前西宮新六。是れ今材木町壹丁目。扱亦五行本始り也。淺草茅町

岩戸屋源八なりしが。今は其板玉水源次郎にあり。云々爰に今といへるは文政の始の事なり。

是も強(あ)ち淨瑠璃節(所謂義太夫節)を語らぬめん爲にはあらで。趣向文章を讀まぬめん料なれば。古くは繪をさへ挿入し。後年江戸にて翻刻したるに。淨瑠璃讀本と題したり。

院本(近松平安作國姓爺合戦九仙山の段)の文傳へ聞く陶朱公は。勾踐を伴ひ。會稽山に籠り居て。種々の智略をめぐらし。遂に吳王を滅(は)して。勾踐の本意を達すとかや。昔をとへば遠き世のためにも。吳三桂が。今身の上にとら雲の山より山に身を隠し。太子を育て奉る。移れば變る。苔むしろ。宮前の楊柳寺前の花。峯の枯木に立かはり。ゆふべの霧の間(ま)には。我身を以て茵とし。鸞

輿屬車の手車も。蔦の錦に織替へて。朝あしたの露のはとりには。谷のまじらの肩に駕し。もや二とせたまきのふ今日暮るゝも山明くるも山。我名も君が顔はせも。人めをつゝむ雲水に虹にじのかけ橋とたえして。深山鳥やぬえこ鳥。梢に來鳴く鸚鵡さへ。昔をまねぶ聲はなし。水遠くして山長く。根笹かや原まさ檜ばら。岷々と聳えし崔嵬の山路に疲れ行く末は。名のみ聞し江寧府の九仙山によぢ登り。まほしたゝぞむ松風も。馴れてや共に住なれし。はうび白髮の老翁二人。石上に碁盤を居ち。黑白二つの石の數三百六十一日に。離々たる馬目。連々たる雁行。わき目もふらぬ碁の勝負。心は笹蟹の空にかゝれる糸に似て。身は空蟬のかれ枝となる。浮世を離れし手段の

業。中間禪のかうたいかと。太子を石段に移し參らせ。枯木の株にねとがひもたせ。見とるゝ我も諸共に。餘念の塵をや拂ふらん。吳三桂輿に乗じなう。老人に物申さん。市中を離れし座隱の遊び面白し。去ながら。琴詩酒の三つの友を離れ。碁を打て勝負を争ひ給ふ。別に樂しむ所ところは候ふか。翁さして答へなく。碁盤碁盤と見れば碁盤にて。碁石と見る目は碁石なり。大地世界を以て。一面の碁盤となすといへる本文あり。心上の須彌山是にあり。大明一國の山河草木。今爰より見るに。なとか曇らん。一角に九十目。四方に四季の九十日。合せて三百六十目。一目に一日を送ると。あらぬ愚さよ。面白面白し。天地一體の樂みに。二人向ふは何事ぞ。陰陽二つツキあらざれば。万

物整ふとなし。勝負はさていかに人間の吉凶は。時の運にあらすや。扱白くろは。夜晝。手たんはいかに。軍の法切てれさへてはねかけて。軍を花の亂れ碁や。飛かふ鳥群れるる鷺と譬へしも。白き黒きに夜晝も。わかで昔の斧の柄も。たのづからとや朽ちぬべし。(以上國性爺合戦)

(四)實錄體

其頃實錄體の戰記。仇討。又は武者修行。一代記の類行はれき。是も一種の小説にして。上代の演義より出で。歴史上著名の人物事蹟杯をりり。潤色附會したる者なり。然るに。寶永の頃(百十年程前)近藤清春といふ浮世繪師。太閤記の所々へ差繪して。開版したるを始めにて。寛永年中(百年程前)に至り。難波に法橋玉山といふ畫工あり。是も太閤記の卷々を畫き。繪本

太閤記と題して。一篇十二卷つゝを發兌し。年を重ねて七篇に及べり。此書普く海内に流布して。院本にも作爲し。江戸にては享和三年。嘘空山人著の太々太閤記。十返舎一九作の化物太閤記など。太閤記と名くる書多く出來て。遂には勝川春亭。歌川豊國。喜多川哥麿などいふ浮世繪師まで。彼太閤記の挿畫を撰び。謂はゆる三枚續きの錦繪に製せしかば。犬うつ童子に至る迄。太閤記中の人物を評する事。遠き源平武者の如くなりき。斯くては遂に徳川家の祖宗。及び創業の功臣などにも。彼是批判の及ぶらん事に慮り。文化元年(八十七年前)五月。彼繪本太閤記を始め。草雙紙。錦繪の類すべて絶版を命ぜられき。此時更に布告せし觸書に。

一 壹枚繪草雙紙の類。天正の頃以來の武者等。名前を顯し

書き候儀は勿論。紋字合印名前等。紛らは敷認め候儀。決して致間敷候。

一壹枚繪に和歌之類。并景色の繪。地名又は角力取。歌舞妓役者。遊女の名等と格別。其外詞書一切認め間敷候。

とありき。此後版本は絶えつれども。諸家の騒動敵討など猶多く寫本にて傳はり。大かた貸本屋の料となれり。

是等の書は。浪花の院本作者の所爲なりと云ふ。余曾て實録體の戦記。仇討もの。諸家の騒動などかける書を見るに。何れも文體一樣よして。一人或は同じ者流の手になり。同時代に出來しものならんと思ひ。何人の作か。いづれ相應に文字ある者の所爲ならん。文章も達意を主として潤飾なけれど。無下に拙しともあらねば。いかで此作者を知らんとゆか。

かりしに。北窓瑣談後篇を見れば。左の文あり。

一 近き頃。太閤眞顯記といふ寫本あり。甚た大部にして數百卷に及びべり。太閤時代の軍物語を。委細に記して俗耳を悦ばしむる書なり。世上に實録なりともてはやす。是は大坂の淨瑠理作者近松並木等が流。うら言を面白く作り連ねたる也。近年淨瑠理芝居流行せざる故。作者も仕業なき様になり。色々の敵討。騒動事。又は軍物語の作り替等を面白く作り出して。俗人を悦ばしめ利を得たり云々。

是にて實録體の作者を知り得たり。

(五) 御伽草子

當時代の御伽草子には。猿蟹合戦。桃太郎の話。又花咲せ翁。

鬼の仇討。さて、鼠の嫁入などいふものありき。いづれも古くは繪卷物にて有りけんを後に鏤版して。冊子となし、物ならん。さて鼠の嫁入といふ繪草紙の事。中山三柳か醍醐隨筆に見えたるは、寛文二百廿年程以前既に行はれしにや。又猿蟹合戦。舌切雀の草子は、寶永年中(百八十年程前)再刊の本あり。寶曆明和の間(百三十餘年前)刻梓せし草紙。今もたま〜遺れ、は初版は元祿以前なりけんといふ。

(六)草雙紙

草雙紙は、むかし淺草紙の漉かへしの。白く薄きを二つ切にして。之に摺りし故紙に臭氣あり。灰墨にも臭氣あり。因りて世俗に臭草子と呼びたりしを。後に書肆等。臭の字を忌みて。草雙紙と書き替へつ。後世は畫面もうるはむく。版刻も精微

なり。良紙に摺りて。表紙は錦繪の如くなれば。臭草子の名は通せずなりぬ。されは始めは和泉太夫の金平本をも。御伽話の繪本をも。共に臭草子と云ひしを。此二種の草子より變じて。合巻といふもの出來。之を専ら草雙紙といへり。合巻とは。當時の草子は五丁を一巻として。全六巻を上下二冊に合せたれば。然云ふなり。

さて合巻は。始めの程は丹色の表紙をかけ。一面に標題を記して。繪を畫く事なし。之を赤本といへり。後一度黒き表紙に改り。赤青などの短冊形の紙を張り。之に外題を記す事となりて。之を黒本と稱したりしを。享保の頃(百七十年程前)より。江戸通り旅籠町の地本屋鱗形屋にて。萌黃の表紙を付け。鳥居風の繪を書けり。之を青本といふ。後又黃表紙と變りたれ

と。猶それをも青本といへり。是には赤き標題紙に畫を加ふる事となれり。

赤本等の草子には古く作者の名を記す事なれば、當時の小説家は誰々なりしや知るに由なし。却て畫工の記名ありされど赤本は觀水堂丈阿といへるが作多しとぞ。青本となりて丈阿和祥。文子。通交。又通幸ともやうく名を記す事となれり。是れ寶曆(百三十年)以前の事なり。此頃の作意は多く一代記やうのもの。又敵討の物語杯なりき。明和安永の頃(百廿年程前)明誠堂喜三二市場通笑出で、教訓を趣意とする草紙出來にけり。

伊波傳毛の記此書は匿名氏稿とわれに。天明の末(百余年前)は實は馬琴の手記なり。喜三二が文武二道萬石飾。戀川春町が鸚鵡返おまじと文武の

二道こは萬石飾の後篇なり。唐來三和が天下一滿鏡梅鉢等の草子。大に行はれしかど。禁諱に觸るゝを以て。命有て絶版せらる。草册子のいたく行はれしは。これらに過ぎざるべし。後には大半紙二つ切に摺て袋をかけ。合卷一冊にして。價七十二文に賣渡したり。所々の小賣店より板元蔦屋へつめかけ。朝より夕迄。恰も市の如し。製本に暇なけれ。摺本の濡れたるまゝ。表紙と糸を添へて賣渡したり。只小賣店のみにあらず。其春三月の末迄。町々を喚びて賣りあるまじ也とあり。其頃流行のさま想ひやるべし。それより引續き。四方山人。芝全交。烏亭焉馬。森羅亭萬象。七珍萬寶。櫻川慈悲成等いせ。草雙紙の發行次第に多くなりつるが寛政元年の春。石部琴好と戯名する者。世直よたじ大明神金塚

之由來と角書つがして、黒白水鏡といふ。所謂黄表紙の冊子を著はし。北尾政演之に畫けり。琴好は本所龜井町に住める。用達町人松崎仙右衛門といふ者にて。政演は即ち山東庵京傳の事なり。然るに此冊子は佐野田沼の騷動を書き綴りしものなる故に。忽ち絶板を命せられ。作者琴好の仙右衛門は。手鎖の後江戸拂となり。政演の京傳も。過料申付られたり。

其頃山東庵京傳も。盛に草雙紙を綴りゑが。中にも心學早染草といふ書。大に行われき。世俗之を善玉悪玉の草子といふ。此事人口に膾炙して。人の非義を行ふをば悪玉と云ひ譏れり。今もたま〜浮世繪なごに。此趣向をとれるも見ゆ。

平田篤胤翁の古道大意に云く。今ノ世ニ戯作者ト云フカ有テ。彼ヤ是ヤノ書物ヲ見カザリ。アソユヲ取テユ、ニ紹





ギ無イトモ有ヤウニ面白ナカシク書取テ其ヲ渡世ト爲
テ居ル者シヤガ略中既ニ本居先生ノ古ニ高皇産靈神ト申
スガ天上ニマシ坐テ世ノ中ノ萬物人種ヲモ御造リ出シ
ナサレタト云フトナ其著ハサレタル書ドモニクレト
言テ置カレ又大禍津日神ト申ガオハシ座テ世中ノ悪シ
キ事ヲツカサドリ大直毘神ト申スガ御坐テ其悪キトナ
善キニ復サウトナサレルト是モ古書ニ據テイヒ置
カレタナ見ルト直サマ善玉悪玉ト云フ戯作本ヲ作りテ。
天道様カ竹ノ管ヲ以テ子供ガシヤボントヤラナ吹ク體
ニ圖ナドヲ書テ世ニ弘メマダ今ハヤル五冊モノトカ云
テ敵討ヤ因果咄シヲ書綴リタルヲ見ルニ近頃ニ出來ル
モノホド古イ詞ヲ交テカキ又一人ニテツブト小言

ナド云フ事ヲ古イ詞デハセトリゴケテト云フ。其戯作本
ニコソナ詞モアル。又俗ニソレハコレハナド云テソハ
コハト云フ。カヤウノ詞モ戯作者ガマテ書ク。コリヤド
ウレテ彼等カ知テカクト云ニ。皆我翁ノ著サレタル書物
ガ古ヘ言テ書テ有ル故ニ。其ヲ見ヤウ見真似ニ。ヤツテ見
ルノデムル。といへり。善玉悪玉の趣向の事は。松の屋與清
も然いへり。さて草子に古言を用ひしは。明和の頃建部綾
足。上田秋成などにぞ始りけむと覺ゆ。うは讀本の條にい
ふべし。

此後。草雙紙合卷の流行いよゝ盛に。趣向も年々巧妙にな
りて。有名なる馬琴。一九。三馬。春水。種彦など。いづれも草雙紙
の著作あり。殊に當時は水滸傳を翻案して。何々水滸傳と名
付くる事いよゝ行はれぬ。又柳亭種彦は。通稱高屋彦四郎と
いひて旗下の士なりしが。頗る草雙紙の戯作に長じて。著書
あまたが中に。修紫田舎源氏しゆしやくらゐげんしといふを數篇綴れり。是は源氏
物語を翻案し。潤飾したるものにて。普く世にもてはやされ
しが。聊か忌諱に觸るゝ所ありて。天保十三年六月。彼草子は
絶版を命せられ。作者種彦の彦四郎も。其頭まかし永井五右衛門方
に召され。申渡されしは。汝高屋彦四郎方に。柳亭種彦と云ふ
者差置候由。右之者戯作致候事。不宜候間。早々他へ遣し相止
めさせ申可し云々と申渡されき。同時爲永春水も。人情本を
作り罪を得て。手鎖に處せられ。此事は人情本の所に演ぶべ
し。小説家ならぬと寺門靜軒も。江戸繁昌記。北里歌評等の著
に據りて。武家奉公ぶがこうこう構を申付られざるに。種彦獨り其罪を免

かれらるは特別の計らひに依るといふ。此田舎源氏世に賞翫せられしからに遂に源氏鯨源氏煎餅源氏蕎麥等源氏の名を冠らすもの多く出来ぬ亦以て當時の嗜好に適ひるを知るべし。此草子より後草雙紙版木の彫刻も細微に表紙繪の彩色も善美を盡して錦繪の如くなり。白縫物語時代加賀見など數十篇を重ねて大尾に至らざる程の大部をも出すに至れり。

草雙紙の文(山東京傳作。絞染五郎強勢談の發端)

長祿年中東山義政公の時代の事とかや東海道なるみの宿に絞染屋四郎助といふ者ありけり。生れつき正直なる者にてもとは鎌倉に武家奉公して居たるが其後此所へ引込み絞染屋へ聲入して一人の男子を設け其

名を四郎太郎と云ひけるが生れつき大力なる上。自から大山石尊大權現不動明王大天狗小天狗に祈りて力を授かりければ其力量いか程といふ限りを知らず。さて四郎太郎十四五歳より大酒を好みやゝもすれば人を打ちたゞき杯して度々村を騒がしめる故せん方なく五年あと十七歳のと勘當して行くへおれずなりけり。其後また一人の女の子を設け妻は産後にはかなくなりうはを抱ゆる力もなければ四郎助男の手一つにて人に乳を貰ひ或ひはすりこ杯してやうくどろたてあけ其名を小よしと付けてことし四才に生れつきいと美しくしく愛らしき盛りなれば蝶よ花よとめで慈しむ手の内の玉の如くに思ひて養ひ育てけり。

扱小よしある日の夕暮。門口に遊び居たるがふと見え
ずなりける故。村中の騒ぎとなり。里人云ひ合せて。五人
七人つゝ手分けをなむ。かね太鼓を打ならし。迷ひ子の
小よしとて呼びわめきて。五里七里。ないし十里が間
の野山の末までも。あまねく尋ね。凡そ七日ばかりも探
せけれども。一向に知れず。若しは狐狸に迷はされしか。
又は荒鷲などにとられしか。さもなくては天狗どのに
まゝ入れたで御座らう。あゝ生れつきもよい子で。年にも
似合はぬ利口者であつたもの。惜しいをさあやつた
といへば。うれしく。こんぢうもたらがが。追分の
饅頭を土産に買つて来てやつたなら。いたゞいて直に
は食はず。父さんに見せて。たべやんすといふたけな。行

儀のよい子であつたぞへ。されはいの。村中に子供も多
いが。小よしほどかあいがられと子。も又とない。おたが
のう四郎助どの。これも前世の約束ごと。あきらめて。
失せた日をめい日に。あとをとむらうてやらしやれと
芋川の畑作。さかい橋の五郎又後家。さか寺のぐわんこ
んぼう。あふぎ川のかなめ婆など。口々に悔みいうて。
涙をこぼすぞ頼もとき。さて四郎助が悲しさは。何に譬
へん方もなく。小よしがもち遊びの張りこの達磨。風車
を見るに付け。之を持って門口に機嫌よく遊んで居るも
のを。どうして迷子に成りをつと。ひもじくあらう泣き
をらうと。子故の闇のぐちなを。口説たてたる男泣き。毎
晩抱いてねかしつけたる時刻になれば。小豆枕や一つ

みの。寢問着のきものが目につきていと猶胸もはり
さく思ひにて。あゝ惣領四郎太郎は勘當と。たま〜ま
うけた小よとめは見えなくなり。よく〜子供に縁な
き者。草葉の蔭の女房にも。云ひわけなしとくやみ泣き。
涙に袖をまほり染め。失せた其日をめい日と定め。若し
生きてなら現世の祈禱も。死しでなら菩提のためと形
見いにのこる手遊びを。持佛ぶつの前まへにうなへつゝ。佛事供養
を營みぬ。これ此草子の發端なり。

(草雙紙は小童兒女にも解し易きを主とし平假名のみにて俗談平話
を用ひき然れども後にはやゝ高尚なる文體をも用ふるに至れり)

(七)滑稽本

草雙紙に滑稽を盡しゝは。安永四年(百十五年前)戀川春町(通
稱倉橋壽平。駿州小島の藩士なり)の金銀先生榮花の夢。及び

翌年出版の高慢齋行脚日記などいふ書嚙矢なりとかや。此
頃平賀源内も滑稽本の著數多あり。何れも滿腔の不平を戯
作に寓せしものながら。後世の滑稽本は。全く其著根なし艸
の類を。小形になしゝものなるべし。下りて寛政の頃(百年程
前)十返舎一九の膝栗毛。式亭三馬の著書など大に行はれき。
此二人は草雙紙にも數多の作あれど。最も滑稽に長じたり
此後に至り鯉丈金鷲の徒出でゝ。八笑人。和合人。七變人など
いふ書を著し。隨分世にもてはやされしが。一九三馬の作に
は遠く及はず。中にも式亭三馬の滑稽洒落筆致の輕妙なる
には。何人も及ばざる所あり。抑一九の膝栗毛世に出るや。製
本間に合はぬばかり。購讀者夥しく。眞に洛陽の紙價。これが
爲に貴しといふ程の。流行なりと由なるが。彼書は滑稽の極

猥褻卑陋の言多し。三馬の作も當世下界の人情を穿ちたるものなれば。卑俗の語なきにあらねど。浮世風呂。浮世床。古今百馬鹿。四十八癖。人心覗機關の如き。いづれも世人が常になす程の。破綻失策を探りて。自然と讀者の頭を解けり。鯉丈金鵝の著し至ては。殊更に奇異なる趣向を構へ。言詞も卑俚の極に達せり。

滑稽本(式亭三馬作浮世床)の文

油でにしめたやうなる。太織の綿入。あいびろうの紋付。すそからぼろをさげて。なきなたなり。のざうりをはき。あたまはさかやぎぼうし。うのくせに氣象たかく。辯舌滔々として。高慢を吐くは。素讀指南の先生。社盟をかきあつめて。やうやく五六輩に過ぎざる。貪書生と見えたり。△残念。関子。齋といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ片田舎の者。遊學。どうた主人。夙に起き夜に寐てかせぐもの。たのびん。これは先生

さん。お早うございます。先生といふては。なめげにきこゆる。孔。これは清貧を樂む氣だから。早く起る氣もないが。家鹿の爲に起され。ヤあたけて。くどうもならぬ。びん。嘉六が酒にでも酔て來や。と。か。孔。此男は何をいふ。鼠が酒に酔て。さまるものか。ハ、びん。へエ。わつちは又筋向の嘉六が例の生酔であたけ。と。か。と思ひや。と。孔。何さ。家鹿との鼠の異名さ。びん。へエ。鼠にも表徳が。と。せへすか。子。孔。表徳かは。じからぬが。社君たの家鹿たのと種々異名があるて。さ。う。ば。から。こ。左官たの壁たのとつけるも。尤た。子。あいつが壁へ穴を明ちや。ア。左官さわぎた。びん。べらぼ。う。め。た。ま。つ。て。居。る。と。ア。イト。そ。う。ぢ。し。て。ゐ。る。孔。獨居して。いると。鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無猫老鼠走。白晝

と。左傳にもある通り。たれを侮てどうもならぬ。王肅が
 逐鼠丸でも欲しいものなテ。逐鼠丸とは京傳の本に書
 てありや。す。直さま買へやすはな。馬鹿アいへあれは
 讀書丸たは。ホンニろうたはけ。孔ドリヤ一ツ刺ても
 らさうか。トみさかゆきをもんでい。孔レ留。モツト敷
 居の脇を能く掃エ。いけぞんせへなべらほうた。いくら
 云ても掃落しやアがる。アイ。帯千里惟留が掃さる
 所なりた。アハ、留ハ奥を潤し床は身を潤すと云ふ
 から。髮結床の隙にも奥の用をさして。水でも汲がい、
 さきついいれせ話さ。関子齋めエ。孔ナンダ関子齋た。ア黄
 白には富たいものな。汝が們まで己を安じをる。ハテ
 残念関子齋。ナツトまづ一ツ関子齋。ハ、孔糞毛受
 をもつて

腰をかくる。びん五郎は髪をとかす孔はむからうの壁ハ、ア
 に張り付けある。寄席のびらを見つめてゐたりしが。
 竹本祖太夫鶴澤蟻鳳。ハテおつな事があるの。漢にも賈
 太夫などいふも有たれど。日本には奇しい。尤秦の始
 皇帝が松に太夫官をば與さ。竹本祖太夫の官をやつ
 た古事も覺すと。扱又鶴澤と置いて蟻鳳と對を取つた心
 はどういふ意であらうナ。コレ主人。あの書たものは何
 にするのたの。びんどれエ。孔あれさす。びんあれは坐敷淨瑠
 璃さ。祖太夫に蟻鳳たから夕も三百ばかり這入やした。
 孔「フム。からいへども根ハテナ。これは俗事に疎いから。とん
 と解せぬ。又こちら今昔物語ト。何た朝寐房。夢羅久。フウ。
 トかんがへ林屋正藏。ハテナ。風流八人藝は、ア。これは
 所謂季氏が八僧のさぐひと見えるナ。此季氏も魯國の

太夫たて。伶は舞列也。天子は八ツ。諸侯は六ツ。太夫四ツ。士は二ツ。伶する毎に人數其伶數の如し。びんモン〜夫は何の數でござりやすエ。是は八伶と云て舞の數たひんわつちは又おつに氣どりやとアハ、。あれはうんな六かとい物ぢやアござりません。八人藝と云て一人で八人の藝をする盲人さ。(以上浮世床)

(八)浮世草子

浮世草子とは。井原西鶴を始め。八文字舎自笑等のかける書。即ち世に西鶴もの。八文字舎本などいふ書を總べて。假に命名せし所なり。西鶴は難波の俳諧師にて。始め一段の淨瑠璃をも書けりし由前にもいへり。天和貞享の頃二百十年程前にや。戯作の草子あまた著はせり。其書は男色大鑑。西鶴織留。

世間胸算用。一目玉梓。日本永代藏。西鶴彼岸櫻。風流盛衰記。三代男。一代女等。此他猶多かり。いづれも専ら遊廓のよきな事をもみ綴りて。頗る猥雜なりしからに。後世識者の譏りを免かれず。されども其書は。世態人情を寫し。言語衣服のさまに至る迄。目前に見聞く所を述べれば。今にして當時の風俗を考證するには。好資料なり。元祿年間に至りては。箕山が大鑑。兩巴卮言。鷺水が丹前艶男。其角が五十四君。團水が新永代藏の類。俳師ならでも。鈴木昌三。淺井了意。錦文流の徒。皆西鶴の流を汲めり。但し其文は唯物を賦するに止りて。一部の趣向なし。自笑。其碩等に至り。西鶴が筆意に倣ひ。一部の趣向を立てるもあれど。猶浮艶鄙俚なるが多し。

西鶴の文。日本永代藏。標題昔は掛算今は當座銀

江戸にかくれなき出見
世壹寸四方も商賣の種

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて。諸事其分際
よりは花麗を好み。殊に妻子の衣服。まゝ上もなき事共
身の程をらず。冥加れろろなき高家貴人の御衣さへ。京
織羽二重の外はなかりき。殊さら黒き物に定まつての
五所紋。大名より末の万人に此似合をさると云事
なき。近年小ざりなき都人の仕出し。男女の衣類品く
の美を盡し。雛形に色を寫し。浮世小紋の模様。御所の百
色染解捨の洗鹿子。物好各別世界にいよりせんさく。女
の身持娘の縁組より内證うすくなつて。家業の障とな
る人数をらず。姦姦の平生さよらを見するは渡世のた
めなり。万民の美婦は春の花見秋の紅葉見。婚禮振舞の

外は目立衣装を着重す共すむ事なり。ある時室町のり
た脇に仕立物屋の軒かほりて。橘の暖簾掛りて。當世着
物乃縫出しすぐれて都の手利ありて。絹綿爰に持つと
ひてさながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし。仕付の糸
火熨あつるを待兼しほとゞぎす。初空卯月一日は衣替
とて色よき袴を縫かけしを見るに。白き紋羅のひつか
へしに。緋縮緬を中に入れて三枚重ねの袴。兩袖襟に引綿
むかしそなかりし事なり。此うへは万の唐織を常住着
となすべし。此時節の衣装法度諸國諸人の身のため今
思ひあたりて有難く覚えぬ。商人のよき絹きたるも見
苦し。紬はおのれにうなはりて見よけなり。武士は綺羅
を本としてつとむる身なれば。たとへ無僕のさぶらひ

までも。風儀常にしてたもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤ほと。本町吳服所京の出見世紋付鑑にあらはし。棚もり手代ろれく。に得意の御屋敷出入ともかせぎに勵みあひ。商買に油斷なく辨舌手たれ智惠才覺算用たけてわる銀をつかます。利徳に生牛の目をよくじり、虎の御門の夜をこめ。千里にゆくも奉公朝には星をかつぎ秤竿に心玉をなして。明暮御機嫌とれども。以前とちがひ今繁昌の武藏野なれ共。隅から角まで手入して。更に小つかみ取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは。其役人小納戸かさの好みにて一商して取けるに。今時は諸方の入札すことの利潤を見掛て食ひ詰になりて。内證かなしく外聞斗りの御用等調へ。剩へ

大分の賣かゝり數年不埒になりて。京銀の利まはらにも合はず。かはら銀はつまりて。難儀俄に取ひろけたる棚も仕舞がたく自から小前になりぬ。兎角はあはぬ算用江戸棚残て何百貫目の損。足もとのあかい内に本紅の色かへてと。銘々分別する時。又商の道はあるもの。三井九郎右衛門といふ男。手金の光り昔小判の駿河町と云所に。面九間。四十間に棟高く長屋造りして。新棚を出し。萬現銀賣にかけ直なると相定め。四十余人利發手代を追廻し。一人一色の役目。さへは金襴類一人。日野郡内絹類一人。羽二重一人。沙綾類一人。紅類一人。麻袴類一人。毛織類一人。此如く手わけをこて。天鷹絨一寸四方。段子毛貫袋になる程。緋繻子鎧印長。龍門の袖覆輪か。

く、にても物の自由に賣渡せぬ。殊更俄か目見の熨斗目急きの羽織などは、其使をまたせ數十人の手前細工人立ならび、即座に仕立これを渡しぬ。さによつて家榮え。毎日金子百五十両つゝならしに商賣をけるとなり。世の重寶是ぞかし。此亭主を見るに、目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく、家職にかはつてかゝること。大商人の手本なるべし。いろは付の引出しに、唐國からくにわ和朝わてうの絹布ぬいをさゝみ、品々の時代絹中將姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿彌陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲團、林和靖か括頭巾くわつちん、三條小鍛冶か刀袋、何によらずないといふ物など、萬有帳めでさし。

(西鶴の草子は大かた猥褻の文辭多し、今心してさらぬをとれり)

(九)小本

小本は浮世草子より出で、遊里洞房の癡情を寫し、嫖客のたはれ言などに、滑稽を盡し、小冊子なり。一に洒落本とも。又菟藟本とも稱せり。これは明和年中に開板せし。遊子放言といふ書を嚆矢とす。

按ずるに平秩東作の萃夜茗談にも、丹波屋利兵衛と云者、浮世師といふものゝ事を綴りて、遊子方言と題して須原屋市兵衛方へ遣しけるを、板行して大に行はれたり。是より唐本表紙の小冊行はれ、廊中掃除、又辰巳の園など、て、數十部出で、より、大本は廢れたりとあり。浮世師とは、今俗に通人とか粹客とかいふ者の事にや。

安永の頃、百十數年前、蓬萊山人歸橋、唐來三和などいふ輩、競

ひて小本を作りしかど。大に行はれむとは聞えず、然るに安永七年(百十一年前)田螺金魚と戯名する者(傳をらず神田に住める町醫師の子なりとぞ)傾城買虎の巻といふ小本を作り、續きて吉田の錦江、振鷺亭などいふ洒落本の作者いで、世にてもてはやされしより、山東庵京傳も、又彼等の虚名を羨み、天明より寛政の始め頃、吉原楊枝(よま)の口舌(くち)辰巳の園、息子部屋をけく、千話、傾城買四十八手など、續々數種を著はしが、世人雅俗となく賞翫せざるはなむ。此前後に、餘人の作も多かりけれと、京傳の著、拔群なりといふ世評ありき。さて洒落本の趣向は、凡べて猥雑にして、風俗を紊すの虞あるを以て、遂に嚴禁の官令あり、且草雙紙といふとも、博徒及び遊閨嫖客の趣きをかきあらはす事をゆるされず、然るに

書肆蔦屋重三郎、窃に京傳に勸めて二種の洒落本を作らむめ、表裏に教訓讀本と題して發兌せり、書中の人物は、姓名を鎌倉時代に擬しけれとも、其實は錦の裏、仕掛文庫といふ例の洒落本にして、猶洞房の記事なりけり、此書も又大に行われしが、遂に官に聞えて、寛政三年の夏、京傳、重三郎とも召捕られ、吟味の後、彼等利慾に迷ひ、法度を忘却せし不束の罪によりて、作者京傳は手鎖五十日、版元重三郎は身上半減の關所仰付られたりき、是より京傳は謹慎第一の人となり、暫くハ戲作の筆硯に親まざりしが、翌年の冬、實語教稚講釋、龍宮糟鉢(さか)の木などいふ教訓を主とし、昔話(むかし)を翻案せし草雙紙を著し、其後讀本をも述作するに至れり。

因に云、當時の小説家は、著作料を得たる事なし、是あるは

京傳に始る。寛政三年娼妓絹籠といふ洒落本を作り。版元
蔦屋より潤筆料として金壹兩を得たりとなん。伊波傳毛
の記に云はく。戯作者は風來山人。及び喜三二。春町等。世に
行へれたれども。著述の潤筆を得たる事はなかりき。早春
其作者へと。板元の書肆より。錦繪草冊子など多く贈り、
亦當り作ありて。夥賣れたる時は。其板元。一夕作者を遊里
へ請待して。多少の饗應をするのみなりき。寛政中。京傳馬
琴が作の草冊子いたく行せらるゝに及びて。書肆耕書堂。仙
鶴堂相謀りて。始めて兩作の潤筆を定め。京傳馬琴之を許
す事六七年。爾後ますます行せられて。其潤筆も漸々に登り
にき。皆是書肆が定むる所に従ふのみ。後に出來つる戯作
者は。例を推して濡筆を得るもあれど。能く京傳馬琴が濡

筆に及ぶ者ある事なし」といへるをも思ひ合すべし。

(十) 讀本

讀本は遠く演義の史より傳統せる。實録體の書と。院本とを
併せて。更に一變したるものなり。既に喜多村節信の筆記に。
讀本といふものを。かきし文章にて。ぬめりたる所を。淨瑠璃
に類し。古語の見ゆるをも。と涼岱が西山物語を手本と云々
る也。ふつゝかなる横ぐいへ。といへる類ひのこと多し云々
とあり。西山物語と。明和五年建部綾足が著はし。所なり。同
十年吉野物語(一名本朝水滸傳)といふをも著し。が。共に中
古の物語文を本として。雅文古言に物したり。後に北川眞顔
が月宵鄙物語。石川雅望が飛彈匠物語。村田春海が竺志船物
語等。いづれも古雅の詞を以て綴りたり。是等ハ唯擬古のす

さびにして。畢竟學者の好事に過ぎず。又安永五年開版の雨月物語ハ。京師なる上田秋成の戲作にて。唯怪談を集めしのみなれども。文體は全く京傳馬琴等の據る所とぞなりけらし。寛政の始め。洒落本の發行禁制ありてより。山東庵京傳も又讀本を著せり。此人もとより意匠に富み。文才あるからに。是はた世人の賞賛を得たり。其重なるは忠臣水滸傳。優曇花物語。うたふ安方忠義傳。稻妻標紙。本朝醉菩提。安積沼。雙蝶記の類。此餘幾はくもあるべし。同じ頃東海道日阪驛に。栗枝亭鬼卵といふ人あり。讀本の類あまたを著し。が。さしたる傑作もなかりし。や。稍後に。江戸に高井蘭山。感和亭鬼武といふ兩士ありき。蘭山も古史の演義。または讀本のみを著して。草

雙紙の述作なり。享和三年三國妖婦傳を著し。文化三年に至る迄。年々發行して。數卷を重ねつ。此外孝子嫩物語。星月夜顯晦録等。皆蘭山の著なり。鬼武の著には。自來也物語あり。兒來也豪傑譚といふ。草雙紙とは別なり。此書大に流行して。文化四年大阪に於て。演劇にも仕組たりとぞ。さて高名なる曲亭馬琴はもと京傳の門人なりしが。出藍の譽ありて。讀本の作に於ては。自ら一體を創し。學識意匠趣向文藻。共に前後に此人の如きとなかるべし。最も世人の愛讀するは。里見八犬傳。椿説弓張月。朝夷巡島記を始め。俠客傳。美少年錄など。今に至るまで行へるめり。此外五冊十冊の讀本にも。勝れて興ある者多かり。總じて此翁の著。刊行の書のみにて。二百九十余種ありといふ。

式亭三馬。十返舎一九。柳亭種彦。小枝繁なども又讀本の著作あれど。皆馬琴の作に壓倒せられて稱せられず。況んやさまでなき。小説家輩に於てをや。

讀本の文(曲亭馬琴作八犬傳芳流閣の條)

古の人云ひすや。禍福の糾ふ纏の如し。人間萬事往とし。塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る處。將禍の伏する所。彼にあれば是にあり。とは思へども豫てより。誰かよくろの極めを知らん。憐むべし。犬塚信乃は親の遺言。紀の名刀。心に占つ身に傳つ。艱苦の中に年を経て。得がたき時を得てしかは。遙々濟我へ齎して。名を揚家を興すべかりし。其福は禍と。ふり替りたる村雨の刃。舊の物ならで。我身を劈く鬻とぞなりし。憾を爰に釋よしも

なく。猝急にして意外にあり。僅に當座の辱めを避はやと思ふばかりに。夥の圍を切開きて。芳流閣の屋の上。攀登れども左右に。脱去べき道のなければ。其處に必死を極めたる心の中は何如なりけん。想像たにいと痛まし。されば又。犬飼現八信道は。犯せる罪のあらずして。月來獄舎に繋れし。禍は今恩報の福。我縛めの索解けて。人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて。愍に擇み出されつ。他の憂を身の面目に。今更用ひられん事。願はしうらずと思へども。推辭て許さるべくもあらぬ。君命重く彌高き。彼樓閣は三層なり。其二層なる檐の上まで。身を霞よせて。登りて見れば。足下遠く雲近く。照る日烈しく堪がたき。頃は六月廿一日。きのふも今日も乾

蒸の燄熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て。下には大河滔々たる。こゝ生死の海に朝る。洄溯は名にたふ坂東太郎。水際の水際の小舟楫を絶て。進退既に谷まりと。敵にこあればいかでわれつぎ緊留んとむき颯の樹傳ふ如くさらゝと。登果たる三層の屋背には目柴せき翳よもなく。迭かたに透を窮ひつゝ。疾視あふて立たる形勢。浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇のな窟ふに似たりけり。廣庭にい成氏朝臣。横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし。床几に尻を打掛て。勝負怎生と向上たる。亦只閣の東西には。身甲ま志さる許多の士卒。槍長刀をま晃りら。或ハ箭を負ひ弓杖突立。組て落なほ擊留んとて。頂を反して之を觀る。加旃外面ハ。縣連として杳なる。河水遶りて砌を浸せば。借使信乃。武事た

け膂力衰へず。能く現八に接得るとも。墨氏が飛鳶を借されバ。虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なけれバ。地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば。絆みな休ん。脱れ果じと見えたりける。當下信乃の思ふ様。初層二層の屋の上まで。追登らんとせし兵等を。斫落しつる後は。絶て近づく者なきに。今只獨り登り來ぬるは。世に覺えある力士ならん。這奴は是れ。膳臣巴提使が。虎を暴にする勇ある歟。又富田三郎が。鹿角を裂く力ある歟。遮莫一個の敵なり。引組て刺迭へ。死するに難き事やとある。能さ敵にころごさんなれ。目に物見せんと血刀を。袴の稜もて推拭ひ。高瀬の如き方桴に。立たる儘に寄するを俟て

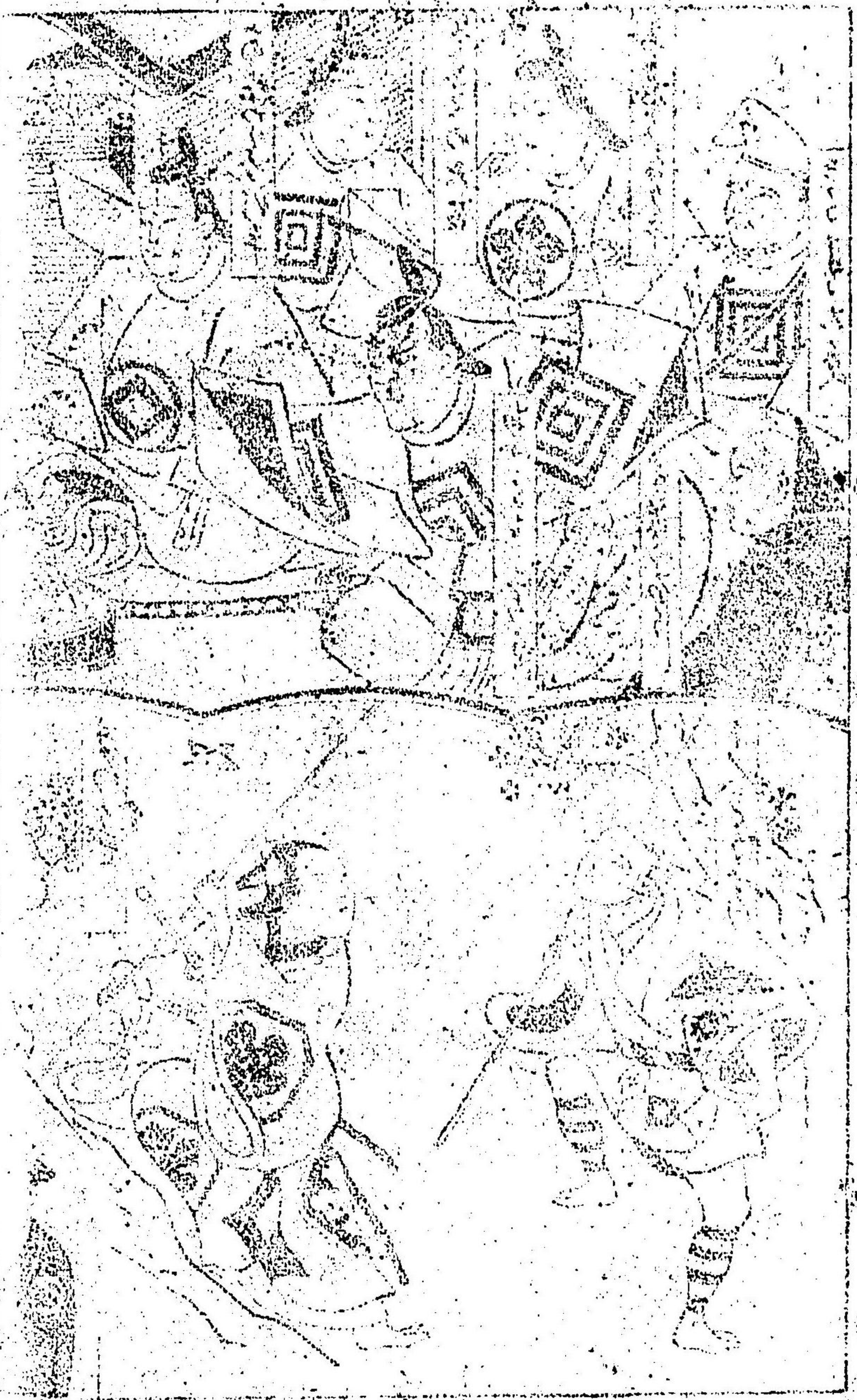
は。見八も亦思ふ様。彼犬塚か武藝勇悍。素より萬夫無當の敵なり。然れども搦め兼て。他の援を借る事あらば。獄舎の中より此役義に。擇出されし甲斐もなし。捕捕るとも撃るゝとも。勝負を一時に決せんものと思ひよければ。些も擬議せず。御錠さふと呼かけて。拿さる十手を閃かし。飛が如くに方桴の。左の方より進登りて。組んとすれども。寄つけず。心得たりと。鋭太刀風に。撃を發石と受留て。拂へば透さず。數刀尖を。挂て流す一上一下。迂る蔓を。踏駐て。頻りに進む捕手の秘術。彼方も劣らぬ手煉の働き。岌より落す太刀筋を。あちこち外す虚々實々。未た勝負を判されば。廣庭なる主従士卒は。手に汗握らざるもなく。瞬もせず氣を籠めて。見るめもいと。適なる。去る

程に犬塚信乃は。侮り難き見八が。武藝に敵を得たりけりと思へば。勇氣彌増て。刀尖より火出るまで。寄ては返す太刀音被聲。兩虎深山に挑む時。錚然として風發り。二龍青潭に入る時。沛然として雲起るも。かくぞあるべき春ならは。峰の霞か夏ならは。夕の虹歟と見る可りなる。いと高閣の棟にして。死を争ひし爲体。世に未曾有の晴業なれば。見八は被籠の鏖。肱當の端を裏歟く迄に。切裂れし。かど太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かで。初めに澁痕を負ひしより。漸々に疼を覺れども。足場を揣て。撓まらず去らず。疊かけて撃太刀を見八右手に受流して。返す拳につけ入つゝ。ヤツと被たる聲と共に。眉間を望て。礮と打。十手を丁と受留る。信乃が刃は鏗際より。折れて遙

に飛び失せつ。見八得たりと無手と組むをうがまゝ右
手に引着て。迭に利腕楚と拿り。振倒さんと曳聲合して
揉つ撥るゝ力足。此彼齊一踏込らして。河邊の方へ滾々
と身を輾はせし覆車の米苞坂より落すに異ならず高
低際とき棧閣に削成たる藁の勢ひ。止るべくもあらざ
めれど。迭に拿たる拳を緩めず。幾十尋なる屋の上より
未遙なる河水の底にいらで程もよし。水際に繋ける小
舟の中へ。打累りつゝ。挫と落れば。傾く舷と立浪に変と
音も水烟。纜丁と張断て。射る矢の如き早河の直中へ吐
出されつ。爾も追風と虚潮に誘ふ水なる洄舟。往方もあ
らず成にけり。(以上八大傳)

(十一)演劇脚本





33732

演劇脚本は、演戲の發達と共に尙も然れども、之を刊行せしは後世の事なり。元祿の頃、大名題、小名題、役附等を詳記し、繪をさへ入て發行せたる物あれども、大かゝ淨瑠理正本、或は筋書といふ物に似て、彼の造り物、鳴り物、衣裝の拵へ杯いふを始め、俳優の出這入、トガキ、思入等の事と記さす。卷首に造り物、鳴り物を次第し、終りを柏子幕とちめて、中に床の淨瑠理、渉り臺詞等をつらね、總べて脚本のまゝを刊行せしは、文政の頃（今より七十年程前）なりきと覺ゆ。上方にては、此前よりありきと覺ゆれど、今思ひいせず。當時鶴屋南北といふ狂言作者種々の演劇を仕組みし中に、文政八年の秋、東海道四谷怪談といふを新作し、中村座に於て興行せしに頗る世評よかりしかば、頓て脚本のまゝを刊行せり。然る

に。彼戯曲ころ。後にも度々興行して。常に世評よかりしか。正本はさまざま行はれずして止みぬ。此後二三の正本を。開版する者もありしが。いづれも流行せざりしかば。遂には演劇の筋を。草雙紙の體に物する事となれり。

(十二) 正本製しやうほんじたて

正本仕立といふ草子は。文政の始め初代柳亭種彦の創意になれり。これは草雙紙と正本(即ち演劇脚本)とを拆衷し。尤も繪事に注意して。篇中の人物を。當時の俳優に擬じ。大小道具衣裝の風に至る迄。舞臺の様をさながらに描き。言詞も臺詞せうごの體に作爲せり。故に之を正本製しやうほんじたてと稱す。珍らくも興あるうらに。眞の正本より勝りて行はれ。年々新作の發行ありしが。種彦歿後は。僅に門人四方梅彦等の著述を見るのみ。うれも今は廢れたり。

(十三) 人情本

人情本は。洒落本より出で、草雙紙の如く續き物となり。迄なり。洒落本は上にも演べし如く。寛政三年悉く絶版を命ぜられ。爾來新作する事をも禁せられしを。東里山人いつしか。籬の花。契情肝粒志などいふ書を著はし。やゝ浮艶の事を述べしが。これ人情本の始めなり。後に爲永春水もこれに倣ひ。専ら人情を寫し。婦女勸善のよめと號し。種々淫奔なる物語を作りし中に。梅曆。辰巳の園。英對談語の如きは最も甚しかりしかば。天保十三年の夏公儀の咎めを蒙り。遊所放蕩の體を畫入に仕組みし事。不束の至りとして。手鎖申付られ。謹慎中に病歿せり。此前後。人情本の作者多く出でたりしが。いづれ

も遙に春水には劣りたり。

沿革總説

以上演べし所を更に一括して云はゞ。上代人文未開の頃には。唯奇怪なる巷談街話のみなりしが。延暦遷都以後。公家世盛りの間は。文學の進歩と共に。小説も又大に進み。假字文の物語盛に出来ぬ。而して當時の小説は。作者も讀者も大かた縉紳貴族にて。専ら高閣深宮の間に行はれき。保元平治の亂後。武家執政の頃には。干戈屢々動き。文運漸く衰へて。小説も又廢れたり。但士大夫以上には繪卷物を弄ぶ事始まり。俗間は首尾不完なる。尙武的巷談の世界となり。室町將軍の時代迄も。さながら續きしが。同時代には別に謠曲といふもの興れり。是はた一種の小説なるを。緩急高下の節譜を作り。樂器

にあはせて奏せしのみ。作者は大かた僧侶なりしも。當時大亂の餘。上下文字なく。筆硯に親しむは。啻彼の徒なりし故ぞかし。此頃より淨瑠璃といふもの行われしが。是も猶謠曲の類ひにて。始めは三絃に合する事もなく。たゞ扇拍子にて諷ひきといふ。

徳川時代の始め。物語は絶えしが。猶一段切の淨瑠璃。金平本の類行はれ。謠曲は足利氏の故例の如く。武家の式樂となりければ。民間には行われず。又御伽話の草子もありき。元祿の頃にも。和漢の學を始め。さらぬ小藝末技に至るまで。大に發達しければ。小説も又從ひて盛りになりぬ。先づ一段淨瑠璃は。進みて五段續きとなり。次第に人情に近き趣向を構へ。必ず首尾を完うする事となれり。又御伽草子と金平本と和

して草雙紙合卷となり。之を赤本といへり。其後黒本と變じ
又青本と改まりて迄は。猶兒童に示す教訓なりしが。黄表紙
と稱する頃より専ら洒落を交へ。滑稽を盡す事流行して。遂
に大人の見るものと定りたりき。
元祿の頃。特に行はれしは。浪花の西鶴自笑等が浮世草子を
ゆけり。其餘波江戸に流れ來て。明和の頃洒落本出でたり。是
れ頗る猥褻なるから。遂に禁制の令下り。著作者罪科を蒙れ
り。是より先。實録といふ一體行はれ。寛政の頃よりは讀本と
いふもの盛になりぬ。此外演劇脚本。正本製。人情本の類もあ
りしが。其種類傳統は上に圖したり。而して元祿以降の作者
即ち物の本書きを數ふれば。金ぴら本の作者に。岡清兵衛。四
野宮彌四郎。北條宮内。塚原市左衛門等を始めとして。淨瑠璃

院本作者は。近松門左衛門。竹田出雲。並木宗輔。紀海音。長
谷川千四。三好松洛。文耕堂。錦文流。並木千柳。西澤一鳳。安田蛙
文。吉田冠子。竹本三郎兵衛。近松半二。爲永太郎兵衛。竹田小出
雲。並木丈助。春艸堂。菅專助。近松東南。淺田一鳥。中村阿契。若竹
笛躬。並木良介。同素柳。村上嘉助。豐竹應律。豐岡珍平。浪岡橘平。
同鯨兒。同蟹藏。中村阿笑。豐田正藏。梁塵軒。難波三藏。黒藏主。二
歩堂。淺田可啓。中村潤助。八民平七。榮善平。北窓後一。笛田因幡。
竹田平七。同外記。同瀧彦。同正藏。小川半平。近松京鯉。笛田伊豆。
並木和輔。竹土丸。福松藤助。竹田文吉。北脇素文。一來堂。寺田兵
藏。松田戈二。竹田新四郎。近松能輔。松田はく。春木元輔。湖水軒。
但馬仙鶴。安田安蛙。戸田吾文。松岡千助。戸川不鱗。但馬彌四郎。
司馬芝叟。千葉軒。豐春助。中村魚眼。近松やなぎ。福内鬼外。立川

焉馬。紀上太郎。筒井半二。松貫四。玉泉堂。源平藤橘。達田辨二。吉田鬼眼。一二三軒。三樂坊。樹下石上。双木千竹。山田案山子。烏亭焉馬等あり。

演劇作者のうち。古く俳優にして作者を兼たるは。元祖市川團十郎。姉川新四郎。市川助五郎。元祖中村七三郎。松鳥兵太郎。藤川半三郎。市山卜平。辰岡久菊。中山來助。尾上新七等あり。又津打治兵衛。樋口半左衛門。藤本斗文。壕越菜陽。金井三笑。奈河龜助。中村重助。辰岡万作。並木正三。並木五瓶。村瀬源三郎。玉松小三郎。江田彌市。津打半左衛門。竹鳥甚助。鈍津與惣兵衛。村山十平治。中村清五郎。津打九平治。同五左衛門。中村清三郎。早川傳四郎。並木良助。津打菅祈。中村太郎左衛門。中村傳七。奈河晴助。門田侯兵衛。増山金八。常盤其堂。眞野馬胡。近松徳三。奈河篤

輔。奈河七五三輔。鶴屋南北。櫻田治助。寶田壽來。瀬川如臯。河竹新七。三升屋二三治。松島てうふ。福森喜宇助等ありき。又浮世草子の作者には。西鶴。箕山。鶯水。團水。立圃を始め。鈴木昌三。淺井了意。錦文流。安藤自笑。江島其碩。南嶺子の徒名高く。丈阿。和祥。文子。通幸等は。草雙紙を書き始めつ。明和安永の頃より。維新の折に至る迄。諸種の草子に著名と九ると。明誠堂喜三二。戀川春町。市場通笑。唐來三和。風來山人。森羅萬象。蓬萊山人。四方山人。朱樂菅江。六樹園。北川眞顔。桃栗山人。芍樂亭長根。窪田俊滿。柳川桂子。米山鼎我。川柳榮。深川錦鱗。鈴木吉路。芳川友幸。物愚齋於連。蘭徳齋。墨蝶亭可立。文溪堂。臍下邊人。四國子。常盤松。四方屋本太郎。王子風車。松泉堂。少振堂。一竹達竹。清水燕十。古風。豊里舟。艶美。奈蒔野馬鹿人。里山。蝸

牛房屯卜。二本坊霍志藝。幾智茂内。紀定丸。常丸。無中點。竹杖爲
輕。飛田琴太。録山人信鮒。二水山人。芝全交。振鷺亭。南仙笑。楚滿
人。栗枝亭。鬼卯。合浦。兎月。優々館。柳浪。文鷹。感和亭。鬼武。高井蘭
山。小枝繁。夢中夢助。鳴瀧。山東鷄吉。薛羅館。喜魚芳。白雪紅。白山
人。榎雨露。住。虚空山人。七珍万寶。万龜。万倍。万理。甲龜。三陀羅法
師。山東唐州。新好。千差万別。物蒙堂。石山。傳樂山人。美足齋。象睡。
錦森堂。軒東。浮世伊之助。録山人。信普。清遊軒。一瓢齋。勝圃。時鳥
館。夜道久良記。秋收冬藏。荒金土成。信夫道彦。見得坊。梅散人。鹿
杖山人。發田芋助。巴扇堂。春道草樹。築地善好。本膳亭。坪平。芝山
人。虚呂利。寶倉主。望月窓。秋輔。樂山人。馬笑。橘香保留。榮邑亭。邑
二。九年坊。時太郎可候。虚呂利館。美明。松亭竹馬。島田金谷。德永
素秋。楓亭。猶錦。面德齋。夫成。待名齋。一世。素連齋。東紫。二代目春

町。戀川行町。二代目万象。櫻川杜芳。同慈悲成。竹塚東子。神屋蓬
州。東里山人。紫色主。祭和樽。全亭正直。西來居未佛。關亭傳笑。花
笠文京。林屋林泉。瀧亭鯉丈。楊春亭慶賀。江南亭唐立。玉樓花紫。
忍岡常丸。美圖垣笑顔。一筆庵英泉。岳亭丘山。松亭金水。梅亭金
鷺。二代目焉馬。黑川亭雪麿。山東庵京山。乾坤坊良齋。笠亭仙果。
萬亭應賀等。此他一わたり知られたるは猶多りるべし。中に
も例の山東庵京傳。曲亭馬琴。十返舎一九。式亭三馬。柳亭種彦
爲永春水の六人を當時裨史の六大家と稱せり。曲亭門人に
櫟亭琴魚。嶺松亭琴我。直亭驥德。琴梧規矩。節亭琴驢等あり。十
返舎の門には。大原市女。東寧舎一河。東墻舎一爪。五返舎半九。
金鈴舎一室。愚舎一徳。半返舎一來。九返舎一八。十字亭三九等
あり。又式亭門人に。樂亭馬笑。古今亭三鳥。一亭三生。益亭三友。

福亭三笑。一亭三子。德亭三好。雪亭三冬。春亭三曉。匠亭三七。一亭三樂等あり。柳亭門下もに。柳下亭種員。柳水亭種清の徒あり。是等の人々が述作なる。種々雜體の草子は。實に汗牛充棟にして。小説の流行。蓋し當時より盛なるにあらざるべし。然れども當時の小説は。民間のみに行はれて。士大夫以上は之を見るを快しとせざる風ありき。著者はた多くは蕩逸の遊冶郎。俗に謂はゆる粹客通人なる者故。學者文人は小説を鄙陋と罵る。淫猥と議して。常に之を擯斥せり。況んや己れ之を作らんとは。思ひたに寄らざりけん。されば小説は唯。估客老圃の願を解くを以て目的とし。小説家は。戯作者の名に満足し。さりしなり。維新以降。一時衰頹の色見えて。新著の小説寥々たりし。近來奎運大に開け。西洋の文學も渡りければ。

彼國の小説を反譯し。或は翻案もして。新著漸く多きを加へ。再び今日の全盛を見るに至れり。其趣向の巧拙。文章の精疎の如き。古今の比較は。茲に辨せず。唯近古の作者は。趣向文章の上のみならず。旁ら繪様に意匠を凝らし。つと見ゆ。今も畫工に一任して作者の好みなきが如し。さても昔は學者の擯斥し。さりしもの。今は却て學者の任とし。凡そ文學に携はる者の。小説か。ぬは。あき程なる。世の變遷。ころ不測なれ。殊に小説は。文學美術の上乗なるものとかいふ説ありて。昔時に比しては。其品位極めて高上になりしなり。あはれ世の小説家。益意匠を鍊り。文章繪畫にも注意したらんには。盛代の文學美術に光輝を増さん事疑ひなし。

小説史稿畢

(坪内逍遙君の手翰)

略前扱御高著早速拜見可仕之處何かと取紛れ本日迄其儘に致し置無申譯。只今始めより拜讀思ひ付候事ども御用には立まじけれど別紙へ書綴り入御覽候。御参考の一端ともならは如何ばかり嬉しく侍らん。僭越ながら御組立といひ御文章といひ雙つながら簡潔にて。なかも洩れたる所なく。敬服奉存候。只慾には作者列傳今すこと詳密ならば我々同好の喜び幾倍せん。御材料は山の如きを何とて吝みたまふかと。身勝手ながら奉恨候。先は御返事のみ匆匆頓首。

十五日

坪内生

(別紙)

小説の起源

西洋にても小説の起源は本文にいそれるが如し。只彼は重に韻語もて綴りたるに。和漢は散文にて物としるの差のみ。希臘の名篇「イリヤド」并に「ナデセイ」の如きは。本文に所謂第三類に外ならねど。全く詩の形をなせるもの也。而して「イリヤド」ナデセイは。歐洲最古の大稗史といふべし。其他中古時代に盛なりし。俠士の物語。さては戀愛の物語の如きも。同じく韻語にて綴りし也。今の謂はゆる「ノベル」(小説)の行はれしは。近代に及びての事なり。英國に誠の散文小説の出来しは。紀元後千六百年代より早からず。小説の定義をむづかしく釋くは。全く後世の意見なり。本來は人の心を娛まするに外ならず。

公家時代には小説上流に行はれ云々

歐洲にても中古封建時代の(韻語にて綴れる)小説は。重に上流の玩びなりしにや。立者とせられざる人物は。押なべて侯伯の高き身柄の人。さらでも文武に秀でたるものゝふ。才色を兼たる姫君なり。下賤の者を立者としたるは稀なり。何れの國にても。小説は奢侈の文學。餘裕ある社會の御伽草子なり。下流一般娛樂の料となりしと。遙に季の世の沙汰なり。

足利時代の謠曲も小説の一種と定む云々

西洋の小説も。既に前に云へる如く。韻語の小説(謠ふべきもの)より轉化せしなれば。謠ひ物より化成せりと云

ふを得べし。扱中古の物語には。自から二種あり。一は専ら武士の功績を語り。一は重に戀愛の物語なり。此二つの者後に一つになりて。今の小説の基を開きぬ。

戦國の時文學あるは只僧徒のみ云々

西洋にても。亂世に僧のみ文學を專有せしかど。小説を物せし例は稀なり。但し英佛の演劇の始めも。何れも僧侶の手になれり。さるは神の靈威。耶蘇の功德。尊者の偉績等を。最初演劇に仕組むによる。神業劇(ミレクルプレイ)といふは是なり。人情世態を演劇に仕組たるは。餘程後なり。希臘時代(二千年以前)の演劇も。最初は神代記に外ならず。蓋し宗教と一般の人心を感せしむれば。何れの國にても早く材料に用ひしならむ。

淨瑠璃

前にいふ韻語小説は。取も直さず我國にいふ淨瑠璃か。樂器に合せて謠ひしともありと見ゆれば。十二段草子に似たり。又別に「バラツスト」と稱して。當時武人中よもてはやされしものあり。是はまゝ陣頭にて。樂人に諷はしめし例あり。我が平家物語と同趣にて。多くは勇まじき軍物語なり。

御伽草子

西洋にては。此類を「フェアリテールズ」(仙話)といふ。重に仙女仙兒仙人等の。或は善童女を救ひしこと。或は善人を助けしことを語る。中には唯譯もなく無邪氣なるもあり。何時頃より行はれしものか知らず。兎に角に古くよ

りありて。今尙もてはやさる。『フヘーブル』に似て異なるも、『フヘーブル』(寓言)なり。『エソップ物語』の如きをいふ。是は獎識の意の明かなる點に於て。前の仙語と同じからず。我國の御伽草子はむしろ、『フヘーブル』(寓言)に近かるべきか。

草雙紙

西洋にては古き小説に挿繪あるは殆ど無し。挿繪を用ひしは近き世の事と覺ゆ。今も畫あるは稀なり。但し仙話は今一般に畫を挿入す。

三馬の滑稽本は世人がなす程の失策破綻云々。三馬は實に我國のアヂソン。スナール歟。英國にても昔は笑を買ふさめにのみ道戯しがアヂソン。スナール。共に

に戯文家さてはフヒールゲン(小説家)出て以來。人情の爲に道戯より。三馬は今の小説の標準をもていふも。一派の小説家さるに近かるべし。

浮世草子

西鶴八文字舎等は。今いふ小々説(ノベレット)。又はスケツチ(端物)の作者あり。西洋にも是に似たる作者多し。近くは米のワシントン。アルビン。實に此派のひとり也。

洒落本

かゝる類ひ必ず西洋にもありしならん。淺學にして知らず。但し猥褻の嫌ひなき限りは。所謂ボンチ中にくい。らもあり。經丈金鵝の如きは。西洋にてはボンチ書きとす。小説家といはず。

讀本

英國にて。時代物の小説を盛にせしは。ナルタル。スコット
トかり。馬琴と時代を同じうす。趣向の豊富文章の流麗。
まゝ馬琴と似たる所あり。唯馬琴は勸懲を緯とし。娛樂
を経とす。スコットは尙別に期する所あり。スコットの
作は小説にして歴史。假作にして事實。史家もさへへて
活風俗史となす。我國にてもてはやす。リットンのは。
誠はスコットの摸倣のみ。

演劇脚本

西洋の演劇脚本は。早くよりシェークスピアの作の。今
尙傳はれるを見て。知るべし。我國の脚本と異なるは
衣裳道具を記さず。思入こゝろ等を一々よとわらぬ。

あり。先づ淨瑠璃院本ならむ。

(饗庭篁村君の手翰)

前略 御著述近頃の悦びにて。樂しく拜見仕候。元より淺學の小
生。殊更歳暮にせまり。書き物に追はれ。おかし。考案の暇も
無之。別段可申上儀も御座なく候。乍併折角御草稿御示しに
なり。何ぞ云ふてもあらはとの御下問に對し。一言なきも却
て失禮と。聊思ひ付候條々。可申上候。

浮世草子といふ名目御立にて。西鶴以下の著を列せられ候
は。至極面白き御分方に候へ共。其起り御記しなきは飽かぬ
心地仕候。愚案には。是は遊女野郎の評判(後世細見記といふ
も、類)の類より。追々細密になり候て。西鶴物生れ出候かと

存候。既に箕山の両巴卮言などは。細見の類かと存じられ候。讀本は。御説の如き傳統より出候と。まさ繪入讀本と普通に唱候。京傳馬琴物は。千路行者の英雙紙。繁々夜話より胚胎致し候と。二筋あるかと存候。其語據は書きふり。皆此二書によりて變化せしやに覺えられ候。洒落本(俗に菑蕪本)なども。風來の假名文選の類の洒落文を小形に作りしが。追々深川吉原の世界に移り候にてはなきか。是等一々書物を取り出して。照し見たく候へ共。御存之通りの乱雜。サア探さうとなりて。あかゝ。知れ不申。夫ゆる考への年代など違ひて。合はぬ事も可有之候。小生曾て思ひ候には。上代の事は姑く置き。近世の小説といふものには。評判細見類より進化したる。風俗人情を實寫し。浮世の狀を細かに穿ちし物と。實録傳記に似つ

かはしくして。人間の盛衰時世の治乱を説く物と。儒者佛者が人を導くための話しを設け手近く面白くせしものとの。三の筋立ありて。夫より小異を生じたるものか。杯と存候。今御著述に委しく分られ。小説傳統表を添へられ候を見て。細密の御用心に感服仕候。實は小生も二三友人とはかり。小説家傳を輯め。また其作柄などを批評仕らんと。身に負はぬ野心を起し。三四年來材料取集め中に候ひしか。御著述により傳統の大概を知り。大助かりに御座候。いつれ參上仕り。御著述に御用ひの餘材。此方へ拜借願ふべく存居候。其折は又御助合願上度候。餘事拜面草々頓首。

十二月廿一日

饗庭與三郎拜

著者曰。本書讀本の傳統を云ふ條は甚だ杜撰なりき。今饗庭氏の手翰に。千路行者の英雙紙繁々夜話より胚胎云々とあるを見て。實にもと心付きたり。喜びと同時に深く粗鹵なりしを耻づかゝる事外にもあるべきを。倉卒の業なればと。看る人幸に之を諒せよ。英雙紙の作者は。通稱を都賀六藏といふ。名は庭鐘。字は公聲。大江山人まゝ大江漁夫とも號せり。繁々夜話。莠草紙。狂詩選等の作者なりかしこに漏れれば。聊爰に追記す。

附 作者略傳

岡清兵衛

岡清兵衛名は重俊櫻井丹波少椽正信が。淨瑠璃正本の作者あり。丹波椽の正本は。世に金平本と稱するもの是なり。此書の趣向は坂田金時が子を金平と云ひ。渡邊綱が子を武綱と名け。俱に強力にして猛獸惡魔を退治する由を書ける也。されば怪力亂神を好む者は。其文句を聞ては。握腕切齒して喜ぶ程に。三歳の童子も。金平の名を知りぬ。清兵衛は眞性詞才あり。強記にして尤も中古の戦記を好み。盛衰記太平記の類は殆ど皆がら暗記せり。殊に儒釋の道は更なり。和歌の方にも一涉り通じければ。古事を引くに得意なりきとぞ。貞享四年の刊本なる。故郷歸江戸吐卷六に此清兵衛が近頃病死し

たりと聞て哀れにも惜しく思ひければ。
金平を作り岡清べう死して惜しや思へば學もさけ綱
とあれば其頃は既になき人と見えたり。

近松門左衛門

名は信盛通稱平馬。相森氏平安堂。巢林子。又不移山人と號す。
長門萩の人なり。幼き時肥前唐津の近松禪寺に遊學し。頗る
内外典に涉り。夙に才名あり。長じて京に上り。ある縉紳家に
奉仕して。旁ら國典に通せり。致仕の後。實弟岡本一抱子の家
に寄寓し。傳奇狂言座の都万太夫が需めにより。始めて一部の
戯曲を綴り。近松門左衛門の戯名を記しぬ。是れ此翁の戯曲を
物せし始めなり。近松門左といふ號は。其身曾て近松寺にあ
りし故舊を忘れじとの微意なりとかや。續きて宇治加賀椽。

井上播摩椽。まゝ浪花なる竹本筑後椽等の爲にも。傳奇の書
數百部を述作し。名聲一時に顯然たりき。淨璃理を五段續き
に綴り。初めしは世繼曾我とて。此翁の創意なり。翁の戯曲を
述ぶるや。唐の大倭の故事を引き。釋氏の譬喩に據れるもあ
り。文章の流暢なるは。自ら一家の風をなせり。其中に國姓爺
合戰。雪女五枚羽子板。曾我會稽山を三絶作とす。國姓爺合戰
の院本。海内に流布せしのみならず。長崎の譯司同文二右衛
門。第三齣樓門の條を清語に譯して。彼邦まで贈りたりき。翁
が傳奇に關する意想。及び文才に富める物語は。尙多く傳り
たれども。長きを厭ひて略せり。翁は享保九年辰十一月廿一
日。大阪に歿す。行年七十二。
墳墓は卒するに先たち。大阪木下目寺町妙法寺に建つ。法號

も又自ら命せし所なり。葬地は攝津の久々智廣濟寺なりと
が辭世の草と聞えしは。

代々甲冑の家を生れながら。武林を離れ。三槐九卿に仕へ。
咫尺に奉りて寸爵なく。市井に漂て商買知らず。隱に似て
隱にあらす。賢に似て賢ならず。物知り似て何も知らず。
世のまがひもの。唐の大和の教へある道々。神釋儒道和歌
有職弓馬郢曲歌舞滑稽の類まで。知らぬ事をけに。口にま
かせ筆に走らせ。一生を囀り散らし。今はのきはに至り。い
ふべき眞の一大事は。一字半句もなき倒惑。至愚の甚しき。
心に心の耻を蔽ひて。七十餘りの光陰。思へば覺束なき我
世經畢ぬ。もし辭世はと問ふ人あらば。
うれ辭世さる程さても其後よ。

殘る櫻のはなとにほむ。

享保九年中冬上旬

入寐名 阿禱院穆矣日一具足居士

不_レ埃終焉期豫自記。春秋七十二歲。

殘れとは思ふもれろが埋火の。

けぬまあたある朽木かきとて。

近松が遺す所の硯門人半二に傳ふ。其蓋に漆して事取凡近
而義發勸懲と記す。この笠翁傳奇の序に。昔人之作傳奇也。事
取凡近云々とあるをとれり。平生の用意想ふべきなり。文政
中浪花の梅園といへる人。近松翁が墓碑の斷滅を歎き。新に
一碣を建てんとす。折柄太田南畝彼地に遊べる頃なりと。か
は。即ち請ひて墓表を撰ましむ。其文に云く。

近松翁碣

浪華梅園主人建

一平安堂近松翁。以善戲文聞于海內。後之作者學其體裁。以爲師法。蓋此方李笠翁也。其墓併配在浪花谷町妙法寺。今爲斷碑。梅園主人新建一碣。使予記焉。按翁本姓杉森。諱信盛。字平馬。長門萩人。父諱某。母某氏。以慶安四年辛卯生。翁享保九甲辰十一月廿一日歿。年七十四。伯出家爲相國寺長老。仲善醫。稱岡本一抱子。叔爲翁。季女錦江。爲俳諧師。擅其名。翁幼遊唐津近松寺。入京事一縉紳爲雜掌。後辭仕居浪花。變姓名稱近松門左衛門。號平安堂。集林子爲宇治加賀椽作戲文云。團扇曾我。其文大行。演戲百日。改曰百日曾我。實元祿十二年也。又作國姓爺一曲。演之三年。至今膾炙人口。翁於事情無所不盡。宛然口氣。感動人意。其孝悌忠信禮義廉耻之風。使人興起。

其功偉矣。唯曾根崎一齣。匹夫匹婦之諒。失死俱歸。名曰心中。此風靡然。害於其政。可謂功罪相半矣。然物夫子一見此文。至其夫婦將死曰。一步霜消。一步霜消。五更三點。唯餘一喟。然歎曰。彼妙處在阿堵中。然則一切一罪。在善聽之者。於翁何病焉。

文政四年辛未仲冬

江戸蜀山人撰

右の文中。一步霜消云々は。曾根崎心中下の卷に。

此世のなごり身のなごり死しに行く身を譬ふれば。あたしが原の道の霜。ひと足つゝに消えて行く。夢のゆめこそ哀れなれ。かぞへくゞて曉の七ツの時が六となり。残る一つが今生の鐘の響きの聞きをさめ。寂滅爲樂と響くなり。とあるをいへる也。一説に。翁は越前の人にて。始め剃髮して僧となり。近松寺の長老に従ひて。古澗と稱し。積業して住職

とまでなれりしが故ありて還俗せりとも。又幼き時遊學せしは唐津の近松寺にはあらで。近江高觀音近松寺御坊なりともいへは。姑く爰に附記す。

竹田出雲

名は清定。千前軒と號す。其祖は阿波の産なり。父清一。始めて江戸に來り。出雲を生めり。程なく清一は出雲を携へて上京し。機關人形を創製し。戯曲を演じる事となりしが。萬治元年二月故ありて出雲椽と受領號を賜はり。寛文二年大坂へ移りて。操り座の元祖となり。享保十一年五日。近江椽と改む。身まかりし後。長子清英。二代目近江椽と號して家を承け。二子清定。出雲の名を讓られき。享保八年三月。大塔宮曦鎧といふ傳奇を稿し。近松門左をして刪潤せしめき。是れ出雲が院本

述作の始めなり。此外生涯の戯作數多が中に。假名手本忠臣藏を傑作とする事。人の知る所なり。菅原傳授手習鑑。義經千本櫻等。これに次ぎて行われぬ。忠臣藏は寛延元年の作なるが。是より先。近松が基盤太平記。並木宗輔が忠臣金短冊などいへるありて。共に赤穂義士の事を。傳奇に作爲せしなれど。出雲の忠臣藏いせよ。より。寒村僻邑に迄行はれ。前の院本は廢れにき。出雲は寶曆六年十月廿一日を以て終る年六十六。辭世の句は。

影涼し水に彌勒の腹袋。

其子を小出雲とて。同じく傳奇を作るに巧なり。新薄雪物語。軍法富士見西行など其筆あり。又並木千柳。三好松洛などいふ傳奇作者も。皆出雲の門より出でつといふ。

西澤一鳳

正本屋九右衛門と呼びて。大阪心齋橋南江四丁目に住む書肆なりき。戯作を好みて院本數曲を著はせり。其重なるは建仁寺供養。井筒屋源六戀の寒晒。頼政追善扇の芝。女蟬丸。昔米万石通。南北軍問答。身替弓張月。本朝擅特山。北條時頼記等なり。中にも北條時頼記は。近松が國姓爺の曲にも劣らず。豊竹座に於て。演戲二ヶ年の間打續きたりと云。享保十六年五月廿四日。病て歿せり。年六十七。辭世の句は。散り行くや。風に常盤の木の葉雨。墓は大阪下寺町大蓮寺にあり。法號常譽貞寂禪定門とかや。紀海音は一鳳が門人なりといふ。

並木宗助

宗助は種姓を知られず。舎柳と號し。通稱松屋宗助と云ふ。享保の始めより浪花豊竹座の傳奇作者となり。院本數多を著はせり。中にも忠臣金短冊。那須與一。西海硯。苜蓿桑門。筑紫轅。和田合戰。女舞鶴。釜淵雙汲巴の如き。今に至りて世に行はる。寛保二年。江戸。肥前椽座に聘せられ。石橋山鎧襲等の戯曲を作れり。居る事數年。故郷に歸り。一谷嫩軍記を書きさして病歿せり。されは此曲は皆から宗助の作にはあらねど。所謂壇特山より陣屋の段に至る。敦盛身替りの條は。全く宗助の意匠なりとぞ。時に寛延二年九月七日。享年五十七といふ。

紀海音

海音姓は榎並。俗稱喜右衛門。後に善八と改む。狂歌に名高き。鯛屋貞柳の弟にて。貞峨と號す。始め黄檗の宗旨を信じ。一丸

比和州柿本寺に入り僧となりしが歸俗して大阪に住じ鑿を以て業とせり。又圓珠庵契沖に従ひて和學を修め。鳥觀齋契周といへり。戲作を好み。院本には紀海音と著名せり。戲曲の世に行われしは。鎌倉三代記。平安城細石。心中二腹帶。油屋。れ染袂の白綾。八百屋。七歌祭文。此餘猶多かるべし。元文元年の夏法橋に叙せられ。寛保二年十月四日歿す。歳八十といふ。大阪八丁目寺町寶樹寺に葬る。法名は清潮院海音日法とや。

近松半二

半二は浪花の儒家。穗積以貫の子なり。若き時頗る放蕩なりしが。天稟の詞才ありて。近松門左衛門に従ひ。寛延四年始めて。役行者大峯櫻を作り。遂に竹本座の戲曲作者となり。述作する所實に數十百種中にも蘭奢待新田系圖。姻袖鏡。本朝廿

四孝阿波鳴戸。忠臣講釋。近江源氏先陣館。妹脊山婦女庭訓。關取千兩幟。伊賀越道中。雙六。新板歌祭文。三日太平記等の如きと。今に至るまで院本演戲ともに行はる。劇神仙壽阿彌。長島曇斎といふ幕府の御連歌師なり。戲曲を好みて。長唱淨瑠璃の作多と言へるとあり。云く。近松は此道の聖なり。出雲は亞聖なり。半二は大賢と稱すべしと。半二天明三年の二月山科に慢遊中に身まかりつと云ふ。享年五十九。遺稿を獨判斷として。同七年に刊行せり。

福内鬼外

鬼外本名は國倫。平賀氏。字は士彝。通稱源内。鳩溪と號す。通稱を以て行はる。風來山人。天竺老人。紙鳶堂等皆其戲號なり。又院本の作名を福内鬼外と著せり。讚州志度浦の人。後江戸に

住めり。源内幼にして才辨あり。夙に立身揚名の志を懷きて郷關を出で。四方に歴遊して和漢の學者を訪ひ。曾て長崎に在て。譯官彭城東吉に就て象胥を學ひ。親しく蘭人にも交りて。粗蟹字をも知り得たり。又江戸に來りては。官醫田村元雄に從ひて。本草物産の學を究め。頗る出藍の譽れあり。物類品隲の著は此學の結果なるべし。唯これのみならず。多才多能の質にて。甘蔗の培養。礦山の開拓。エレキテルの製造。火浣布の發明より。はかなき業の工夫まで。往々人を驚かし。事ありき。元來倣儻豪邁にして。細瑾を顧みず。本意の貨殖經濟の術を以て。世に用ひられん事を望みし。不幸にして生涯知己を得ず。不平積鬱の餘。晩年に至り。彌々自恣放縱にして。一世を傲弄し。戲編の草子に憤りを泄すに至れり。畢竟詼諧

を述べ傳奇を作るは。源内が末技なり。此餘緒を以て此人を議す可らず。明和七年の春。吉田冠子の勸めによりて。始めて神靈矢口渡と云ふ院本を著せし。其書の跋に見えたり。されど其實。新田の神の祠官某は。源内が相識なりしが。ある日某。源内に語りけるは。本祠は畏くも。南朝の忠臣新田義興朝臣の神靈を。齋き祀る所なるを。世に知る人稀にして。近來堂宇傾頽し。誰詣する者なきを。何卒して神威の炳焉なるを知らしめんと願ふ也。其許にも。いかゞ我志を助け給ひてよといへは。源内は安き事なり。我に一策あり待ち給へて別れしが。不日にして。矢口渡の傳奇を作り。操曲に演せしかは。俳優藝妓等を始め。大方の人さへ競ひて。彼所に參詣し。神垣のうち群集して。荒れに社殿も忽ち修復したりとい

ふ。此後猶數曲を著し、弓勢智勇湊、荒御魂新田神德、嫩松葉相生源氏忠臣いろは實記、前太平記古跡鑑、實生源氏金王樓、源氏大草子等世に行はれき。此他滑稽の草子にも、假名文撰、根なし艸、志道軒の傳、菩提樹の辨、仙術金のなる木、蛇腹青大通、菊の園等あり。安永八年の冬、源内門生と假初の口闘より事興り、遂に之を殺害して獄に下る。一説に某侯別業を經營の時、看督の匠工、源内に就て謀る所あり。源内爲に計畫豫算を録して之を示し、相歡びて燕飲し、夜も更さればとて、源内が家に一宿せり。翌朝源内豫算計畫の手記を索むるに非されば、必定匠工の偷みし事と疑ひ、之を責むれとも抗辨して屈せず。源内怒て之を斬り、遂に死に至らしめきと云ふ。但し是前より時々慢言放論、少しく喪心の態ありき。明年元旦獄

中の口吟に。

去年つぎと首て又見る初日の出。

二月の頃病て獄中の鬼となれり。享年五十一。去年の初冬人に示して自讃せし俳句に。

乾坤の手をちりめたる氷かか。

といへり。後に思へば辭世の識となりけり。源内生涯獨居にして妻子なれば、從弟某遺髪を得て淺草橋場總泉寺に埋め、私に法號を智鑑靈雄と贈れり。翁の崎談はこれに盡きず。委しくは余が鳩溪叢談に記せり。今唯一端を抄録するのみ。

近松徳三

幼名勝助といひ、徳三を通稱とし、後に徳叟と改む。俳號雅亮。

浪花坂町の娼樓、大栴屋勝右衛門が子なり。幼き時より戯曲を好み、近松半二の門に入て院本數十部を著はせり。中には箱根靈驗、鬻仇討、花上野譽碑、敵討優曇華、龜山など尤も佳作と聞ゆ。後年演劇の作者となりて、司馬徳叟また芝屋徳叟とも稱せしが、程なく近松の舊稱に復せり。文化の始め、熊澤蕃山が露の干ぬ間といへる今様歌より案じ付きて、朝顔の演劇を綴りしを、故ありて未だ奏演せざりしに、文化七年八月廿六日、可惜病て歿せり。享年五十七。さるは此脚色も畫餅となりしを、同門の後進近松柳、頗る遺憾の事に思ひて翌年之を讀本舩に補綴し、徳叟遺稿朝顔日記と題し板行せり。其後更に演劇に改作し、又嘉永三年生寫朝顔話といふ院本も出來しが、實は徳叟が意匠の趣向を聊か校補したる也とぞ。

井原西鶴

西鶴ハ俳諧の師にて、大坂槍屋町に住す。始め西山宗因の門に遊びて、松壽軒と號し。又難波俳林と稱す。ある日住吉の社頭に於て、獨吟二萬三千句を吐きしより、二萬堂また二萬翁とも別號せり。此翁俳諧を以て本業とせしと聞ゆれども、世俗の口吟とする秀句甚だ少なし。今秀逸なりとて人口に残るは、

我戀のまつ島もさぞ初かすみ。

長もちに春かくれ行く衣がへ。

鯛は花は見ぬ里も有今日の月。

大晦日定めなき世の定めなり。

是等二三に過ぎず。却て戯作の草子に名高し。天和の頃、竹本

筑後少椽の委囑により。こよみ。又は凱陣八島おといふ。淨瑠璃木を綴りし事もありしが。元來博學多識といふにはあらねど。能く世態人情にわたりければ。目前に見る所の情實を述べて。根なし事の草子あまゝを作れり。其書は男色大鑑好色一代男。一代女。二代男。三代男。世間胸算用。一目玉梓。日本永代藏。櫻陰秘事。風流盛衰記。西鶴織留。名殘友。彼岸櫻等なり。之を世に西鶴物といふ。いづれも滑稽詼諧にして能く。估客老圃の頤を解けり。後自笑其頤の徒皆此翁が筆意に倣へり。實に戯作者の鼻祖といふべし。元祿六酉年八月十日歿す。享年五十二才。墓標は大阪八丁目寺町誓願寺にあり。俳諧の弟子下山鶴水北條團水の建つる所なり。西鶴が辭世の句として。彼岸櫻といふ遺稿の端に載せたるは。

人間五十年の究り。うれさへ

我にぞ餘りあるに。まゝしてや。

浮世の月見すこと。にけりす。乙二年。

難波俳林松壽軒西鶴。

とあり。

畠山箕山

箕山と呑舟軒と號す。俗稱常次。西鶴と同時の俳師なり。其著す所。色道大鑑十八卷を。六十餘州の花街を歴遊し。年を積む事三十餘年にして。脱稿せりといふ。はかなき著述なれども。熱心のほど想ふべし。晩年轍を改めて。世を益する著書の發兌もありきと聞こゆ。

青木鷺水

鷺水は歌仙堂と號す。又白梅園三省軒の別號あり。京師の人にして野々日立圃の門に入り。俳諧を能くす。然のみならず詞才衆にすぐれて。世態俗事を寫し。其筋の著書多しとぞ。享保十八年三月廿六日歿す。

安藤自笑

自笑は本姓藤原氏。通稱八文字舍八左衛門とて。京師麩屋町通誓願寺下る町に住める。書肆の主人なるが。文才ありて戯作の冊子あまたを著はせり。野傾色孖。分里艶行脚。都鳥妻戀。笛裾野櫻。風流御伽會我。全東海硯。全東鑑。全軍配團扇。浮世親父形來。傾城玉子酒等。此猶多かり。傾城禁短氣。全曲三味線色。三味線などは。江島其碩と合作なり。抑自笑の戯文は大かた其碩か助筆なるを。自笑一人のみ著名して發兌せしに。常に

世評よく。名譽と利徳と。共に自笑一人に歸するにぞ。後には其碩之を羨み。自笑其碩合作の趣きに著名したりといふ。又一説に。自笑は唯射利に心とき。估人にして。固より文藻に疎く。著述の才など。始めは其碩をして代作せしめ。其碩と絶交の後。是多田南嶺して。己れに代りて綴らしめつといふ。故に自笑は金力を以て。諸家の合力を買ひ。遂に文場に名高き人となりしとぞ。延享二丑年十一月十一日歿す。歳八十餘。京都二條寺町本覺寺に葬れり。

江島其碩

其碩は俗稱市郎右衛門といふ。其祖はもと京極通誓願寺門前に小舗を開き。餅を製して鬻ぎたりき。世は之を大佛餅とて。はやされて。忽ち巨萬の財主となり。代々江島屋太郎右

衛門と名告りしが其碩の世に至り。いつしか其業をやめて。四條御旅町に移れり。其碩若かりし時頗る放蕩にして。遊里に巨多の財を散じ。奢靡を事として産を失ひけるが。性來詞才に富めるをもて能く下界の情態を述べ。多くの戯作を物したりき。中にも傾城禁短氣などは。全く己れの作なるを。自笑に與へて刊本とせり。實は烟花の一絶筆とや。自笑が著述は。大かゝ此翁が加筆なりし由は前にも云へり。翁晚年名利を求むるに急にじて。遂に自笑と絶交し。己れのみ著名して發梓せし書も多かりしが。趣向文章とも前著自笑の名にして發梓せし書に劣るとにはあらねど。何如せん年來聞えし自笑が雷名に壓せられ。其碩の名は稱する者稀なりき。其碩が歿年傳はらず。思ふに享年七十にして。元文元辰年六月に身まかりし歟。うは翁の遺稿其碩置土産。洛東其跡が序して。七十年はたつの年のみな月に此世をさりぬ云々」と書けり。此書の發行は元文三年なれば。その二とせ前。元文元年に歿せしなるべし。

南嶺子

南嶺は多田氏。初名政仲。又滿泰。義俊とも改めつ。通稱進藏。又兵部といふ。攝津の人にして京師に遊び。壺井鶴翁の門に入りて。國學を究め。尤も典故に精し。又俳諧を平時庵談々に學びて。男鈴と號し。後南嶺に改む。桂秋齋は其別號なり。南嶺博識強記。能く雅俗の事に涉り。見聞一たび過ぐれば終身忘れずといふ。享保の初め。洛に在て多田將監と稱し。専ら甲州流の兵法を究めしりしが。最も長ずる所は典故の學にして。撰

者の後世を裨益するも又極めて多かりき。然れども惜いかな。操識なく。品行放縱浮靡にして。窮する時を人を謀るの癖ありき。されば後世國學の先師。兵鈴の達士と仰く者なく。貶して西鶴自笑の徒となすも宜なりや。さても自笑其碩の間に隙を生じてより。さしも流行の浮世草子暫く絶えてはかゝるべき新作もなかりし所に。南嶺自笑が需めにより。代りて作り初めけるが。趣向筆勢をさく其碩より劣る事なく。中にも鎌倉袖日記は。普ねく世人の喝采を博し。遠く其碩の上を立てり。南嶺草子を綴るに。趣向肚裏に湧けは。直に筆をとりて文を成す。曾て稿を代へし事なしと。而して趣向盡くる時は。朋友知己を固より我身の上の來歴まで。小説に取り做せり。甚しきは。朋友の名を地名に替へ。又は其儘用ひたるも。

あり。武遊二ツ巴といふには。現に我身の上を書きし也とか。南嶺の寛延三年九月十二日歿す。享年五十三。嶺が生涯の奇談は爰に盡きざれども。多くは戯作に拘らぬ事なれば漏れつ。著述の書目も又然り。

建部綾足

建部綾足は凉岱と號す。東奥の士にて。若き時身の程の高き人に思はれ。其事露はれて亡命し。平安東福寺に入て出家し。漸く登りて喝首座といへり。性物に敏く。才藝人の跡を踏まず。或時人の俳諧するを聞きて。己れもして試んとて一句を吐きけるを初として。三月斗りに其導きし人の句を。兎かく批評し作り替へなどせしむ。其人閉口する程になれり。後加賀に遊びて。俳諧に名ある希因を師とし。伊勢より行きては。乙

由り流を汲み。終に還俗して江戸に來り。淺草雷神門前に住む。風神の袋負へる像を喜びて。自ら涼岱と號し。俳諧を以て業とせり。其頃國學の大家加茂眞淵翁。専ら萬葉の古風を興すにより。我妻を門人とし。己れ竊に其説を取りて學び。終に俳諧を止めて片哥といふ事を唱ふ。是は古事記に出たる日本武尊の御作。

にひばり筑葉を過ぎて幾夜かねつる。
と遊はしたるに基き。之を旋頭歌の片歌といひ。五七五の常の様なるをも片歌といへり。かくて伊勢の能保野なる尊の薨じ給へる跡に碑表を建て。又華山院右府の公に請ひて。片歌道守といふ四字を書きて賜はりしを。扁額として壁間に掲げ。心に飽かぬ事ある時は。之を仰ぎて憂を遣るといへり。

又國風の文章は最も古雅にして。筆勢の鼓舞比類なむ。さるは古き物語ぶりの書あまた綴れり。繪事は始め何の流を學ひしにや。一とせ長崎に至りて。熊斐に従へりとも聞ゆ。後京へかへり。もてに妻を伴ひ東のかさに遊びしが。上野熊谷の驛に病みて。門人の家に身まかれり。時に安永三年三月十八日なり。俳諧片歌の書。畫帖など。著述あまゝ印行せしうち。小説にも西山物語。吉野物語等ありき。

上田秋成

秋成は餘齋と號し。又無腸とも稱せり。花洛の人にして。娼家に生る。性來奇癖ありて。唱ふる説も爲す事も。常に人には異れり。自からいふ。世の人は縦よ行けども。己れは心から横よに向くとて。別號を無腸とぞ付たる。これ蟹を横行介士とも。無

腸公子ともいへは也けり。和歌及び茶道に至り深くして。伊勢の本居宣長翁。京の小澤蘆菴にも交り厚かりき。妙法院の宮へも折ふし參る事ありしが。ある時。手つくねの茶器を獻りしに。宮御親ら筆を染め給ひて。蟹の畫を遊ばし。これに讚歌せよとて下されしを。秋成甚く喜ひ。やがて麗しく表装して。餘白は歌かくべかりしを。さては恐ごとしとや思ひけん。装ひ立てし表具の絹に。

津の國の難波に。つけてうとまる。芦間の蟹の横はへる。身は」と書きつけたり。平生の豪放なるに似ず。謹み深し。や。文章はた習はずして能く達せり。雨月物語の如き。若かりし時の筆すさみなり。戯作の草子には。諸藝聞耳世間猿。まゝくせ物語なとあり。これも伊勢物語に擬して。をかゝしき事を

かけるものなり。國學の著書もあまたあれど。爰に載せず。翁は文化六巳年十一月廿六日。享年七十八にて歿せり。からは洛東南禪寺中西福寺に葬りぬ。

因に云。秋成は。歎討崇禪寺馬場といふ。院本に名高き。生田源八郎の遺子なり。母は花屋某といふ。娼家の女なれども。かゝる人の胤なれば。種姓をも深く隠して。唯由縁ある武士の胤なりと披露せけるが。秋成生長するに従ひ。其業を賤し。家をも他へ移し。遂に茶香歌俳の諸道に達して。名をなすに至れりとぞ。委しき顛末は。西澤一鳳の言狂作書に見ゆたれと。事長けれり略す。

戀川春町

名は格。源姓。俗稱倉橋壽平といふ。狂歌を好みて。酒上不埒と

戯名と又壽山人と號す。駿州小島侯の家臣にして。小石川春日町に住めり。戯作の草子に。戀川春町と著名するは。居宅の地名によれるなり。安永四年。金銀先生榮花夢といふ草子を著し。翌年又高慢齋行脚日記を著して。名聲一時に籍甚たり。此餘花鳥かくれん坊。鼻峯高慢男。三幅對紫曾我。三升増鱗の始め。夷大黒若氣誤等。數ふるに勝へず。寶曆以來。草子の體是より一變せりといふ。寛政元年七月七日。病に罹りて家に歿す。享年四十六。四谷新宿裏通淨覺寺に葬る。法號寂靜院廓譽。泄水といふ墓標の左に辭世の句を刻せり。曰く。

生涯苦樂四十六年。即今脫却浩然歸天

明誠堂喜三二

喜三二は平澤氏。俗稱平格。喜三二は戯號なり。又龜山人と號

す。狂歌を好みて。手柄岡持と名告り。俳諧に月成。狂詩に韓長齡とも。天壽とも云ふ狂名あり。秋田藩主。佐竹侯の留守居役にして。下谷三線堀の邸内に住めり。著述の草子極めて多し。中に案内手本通人藏。文武二道万石通。鐘入七人化粧。古朽木。運開扇子花など。世に聞えぬ。古朽木は靜觀坊の下手談義。風來の根など。艸の文體にして。運開は草雙紙なり。老年に及ひ仕を辭して。剃髮し。平荷と號せり。文化十年五月廿日歿す。歳七十九。深川淨心寺に葬る。

市場通笑

名は寧一。字は子彦。市場氏橘栗は俳號なり。俗稱小平二と云ふ。通油町に住し。生涯無妻にして。市中の仙と好みて。稗史を戯作し。安永八年。始めて酒の癖正直咄などいふを發兌し。